

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
会頭特別企画	1	ビッグデータがどのように医療・医学を変えるか	医学・医療の分野もビッグデータ時代に入りました。次世代シーケンサの急速な発展は、米国をはじめとして、稀少疾患の原因遺伝子の同定、がんのドライバー遺伝子の診断と至適分子標的薬の決定など、臨床応用を広く推進している。また、欧州では住民のゲノムと生活習慣情報を大規模に追跡し、多因子疾患成立機序の解明と予防を目指したバイオバンクが多数構築されている。さらに、ウェアラブル・センサーとスマートメディアの発展によって、個体の健康・疾患情報を24時間連続測定するモバイル・ヘルスが、慢性疾患の治療の方式を変革すると期待されている。また、電子カルテ・医療情報を大規模に集積したリアルワールドデータが、医療実践の評価、創薬の実践に大きく寄与している。さらに、最近の人工知能の発展は、医療診断の高精度化、医療ビッグデータの解析、医学知識の新発見を推進している。本セッションでは、こうしたビッグデータの構築とそれを活用した医学研究・医療応用に焦点をあて、これからの未来の医療・医学がどう変革されて行くのかを検討する。	オガナヅ-1	田中 博	東京医科歯科大学 統合教育機構・イノベーション人材育成部門	名誉教授	—
				オガナヅ-2	脇 嘉代	東京大学大学院医学系研究科 社会医学専攻医療情報学分野	准教授	—
				座長1	田中 博	東京医科歯科大学 統合教育機構・イノベーション人材育成部門	名誉教授	—
				座長2	脇 嘉代	東京大学大学院医学系研究科 社会医学専攻医療情報学分野	准教授	—
				演者1	田中 博	東京医科歯科大学 統合教育機構・イノベーション人材育成部門	名誉教授	ビッグデータ・AIによる医学・医療の第3次革命と未来の医療
				演者2	宮野 悟	東京医科歯科大学 M&Dデータ科学センター	センター長	ビッグデータとしてのゲノム情報と医学・医療の変革
				演者3	脇 嘉代	東京大学大学院医学系研究科 社会医学専攻医療情報学分野	准教授	モバイル・ヘルスと「情報による治療」
				演者4	浜本 隆二	国立がん研究センター研究所 医療AI研究開発分野	分野長	医療人工知能の現状と将来の発展
				演者5	大江 和彦	東京大学大学院医学系研究科 社会医学専攻医療情報学分野	教授	リアルワールドデータの医療・創薬への応用
会頭特別企画	2	医療と臨床研究における患者・市民参画（PPI）	—	オガナヅ-1	武藤 香織	東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター公共政策研究分野	教授	—
				オガナヅ-2	藤原 康弘	独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）	理事長	—
				座長1	武藤 香織	東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター公共政策研究分野	教授	—
				座長2	藤原 康弘	独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）	理事長	—
				演者1	東島 仁	千葉大学大学院国際学術研究院	准教授	科学技術・イノベーション政策からみたPPI
				演者2	山口 育子	認定NPO法人ささえあい医療人権センターCOML（コムル）	理事長	医療における患者参画
				演者3	吉川 祐一	一般社団法人日本難病・疾病団体協議会	代表理事	難病患者の生きる希望としてのPPI
				演者4	桜井 なおみ	一般社団法人全国がん患者団体連合会	理事	ナラティブな体験をサイエンスに還元する
				演者5	近藤 充弘	日本製薬工業協会 医薬品評価委員会	副委員長	製薬企業の立場から
				演者6	中山 健夫	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野	教授	医療と臨床研究における患者・市民参画（PPI）
				演者7	勝井 恵子	国立研究開発法人日本医療研究開発機構 研究公正・社会共創課	課長代理	AMEDにおける「研究への患者・市民参画（PPI）」の取組：医療研究開発の「社会共創」を目指して
				演者8	北林 アキ	独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 信頼性保証部	調査専門員	規制当局の立場から：PMDAの取組み

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 番号	セッション内容		趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
会頭特別企画	3	2024年の医師の働き方改革元年を翌年に控えて－課題と展望			オガナイザ-1	門脇 孝	国家公務員共済組合連合会 虎の門病院	院長	－
					オガナイザ-2	瀬戸 泰之	東京大学医学部附属病院	病院長	－
		セッション形式	シンポジウム		座長1	瀬戸 泰之	東京大学医学部附属病院	病院長	－
		セッション日時			座長2	楠岡 英雄	国立病院機構	理事長	－
		セッション時間	180分		演者1	瀬戸 泰之	東京大学医学部附属病院	病院長	医師の働き方改革－課題と展望
		聴講者	医師		演者2	遠藤 久夫	厚生労働省医師の働き方改革の推進に関する検討会／学習院大学経済学部	座長／教授	国の討論会での議論から見えてきたこと
		席数			演者3	佐々木 康輔	厚生労働省医政局医事課医師養成等企画調整室	室長	医師の働き方改革について－厚生労働省の立場から－
		単位対象			演者4	岸 玲子	日本医学会連合労働環境検討委員会／北海道大学	委員（前委員長）／特別招聘教授	どうすれば「勤務医の健康確保」と「良質で安全な医療」が両立するか？
					演者5	角田 徹	公益社団法人日本医師会	副会長	勤務医の先生、女性医師の先生、どうします？
					演者6	森 正樹	東海大学	医学部長	外科医の立場から
					演者7	岡留 健一郎	日本病院会／済生会福岡総合病院	副会長／名誉院長	2024年の医師の働き方改革元年を翌年に控えて－病院全体での改革推進を－
会頭特別企画	4	COVID-19に世界はどう対応したのか？どう対応するのか？		新型コロナウイルス感染症のパンデミックは未曾有の事態となった。その感染症が中国武漢で発生したらしいという情報から、瞬間にそれは世界を席卷することになり、その治療を含む臨床対応、Non-Pharmaceutical Interventions、公衆衛生対応、さらに治療薬やワクチン開発とその配布など、様々な課題が明らかになってきた。同様な世界規模の公衆衛生危機が起きるリスクは今後もあることから、新型コロナウイルス感染症のパンデミック禍で世界はどのように対応してきたかについて検証しておくことは、極めて重要である。	オガナイザ-1	満屋 裕明	国立国際医療研究センター研究所	所長	－
					オガナイザ-2	山本 尚子	WHO（世界保健機関）	事務局長補佐	－
		セッション形式	シンポジウム		座長1	満屋 裕明	国立国際医療研究センター研究所	所長	－
		セッション日時			座長2	山本 尚子	WHO（世界保健機関）	事務局長補佐	－
		セッション時間	120分		演者1	Anthony Stephen Fauci	アメリカ国立アレルギー・感染症研究所（NIAID）		Pandemicにおける正しい「科学」の重要性
		聴講者	医師・学生		演者2	山本 尚子	WHO（世界保健機関）	事務局長補佐	Pandemic対応に関する国際機関と国際協調
		席数			演者3	Audrey Tang	台湾 IT担当大臣		Pandemicと情報戦
		単位対象			演者4	Richard Hatchett	Coalition for Epidemic Preparedness Innovations		
					演者5	Peter Horby	Pandemic Sciences Institute, University of Oxford, UK		
会頭特別企画	5	COVID-19に日本はどう対応したのか？どう対応するのか？		新型コロナウイルス感染症は未曾有の感染症である。疫学も臨床像も病態生理も全く分からないままのところから、知見を得つつ感染症対策を行い、同時に研究開発を進めることが必要であった。また医療、公衆衛生のみならず社会活動一般への影響は甚大であった。過去20年を振り返れば、ほぼ5年ごとに新興再興感染症が問題となっている。新型コロナウイルス感染症のような問題がまた数年内に起こる蓋然性は極めて高い。これに備えるため、今回の新型コロナウイルス感染症を総括し、課題を引き出し、対策の方向性を定めておくことは極めて重要である。	オガナイザ-1	岡部 信彦	川崎市健康安全研究所	所長	－
					オガナイザ-2	大曲 貴夫	国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 国際感染症センター	センター長	－
		セッション形式	シンポジウム		座長1	岡部 信彦	川崎市健康安全研究所	所長	－
		セッション日時			座長2	大曲 貴夫	国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 国際感染症センター	センター長	－
		セッション時間	120分		演者1	押谷 仁	東北大学大学院医学系研究科 微生物学分野	教授	新型コロナウイルス感染症への各国の対応と、日本との比較、そこから見える本邦の課題と進むべき方向性
		聴講者	医師・学生		演者2	大曲 貴夫	国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 国際感染症センター	センター長	臨床対応の経緯、課題と、今後進むべき方向性
		席数			演者3	岡部 信彦	川崎市健康安全研究所	所長	感染症危機管理体制の経緯と、今後の日本の進むべき方向性
		単位対象			演者4	脇田 隆字	国立感染症研究所	所長	感染症危機における専門家助言組織と国立感染症研究所の役割
					演者5	河岡 義裕	国立国際医療研究センター 国際ウイルス感染症研究センター／東京大学医科学研究所ウイルス感染部門	センター長／特任教授	未定
					演者6	武見 敬三	参議院議員		社会全体としての対応の経緯と、今後の進むべき方向性

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容		趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
会頭特別企画	6	COVID-19 ダイジェストセッション（仮）			オーガナイザー-1	—			—
					オーガナイザー-2	—			—
		セッション形式	シンポジウム		オーガナイザー-3	—			—
		セッション日時			座長1	満屋 裕明	国立国際医療研究センター研究所	所長	—
		セッション時間	120（仮）分		座長2	大曲 貴夫	国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 国際感染症センター	センター長	—
		聴講者			座長3	南学 正臣	東京大学大学院医学系研究科 腎臓・内分泌内科	教授	
		席数			演者1				
					演者2				
					演者3				
会頭特別企画	7	ヒトがん生物学が教えてくれるもの 一次世代がん治療戦略の構築に向けて—		ゲノム科学を始めとする近年の医学・生物学の急速な進展は、ヒトがんの発生と進展に関する多くの新たな知見を提供し、我々のヒトがんに対する理解を大きく変えてきた。また、分子標的薬を始めとする多くの治療戦略の開発により、ヒトがんの理解にとって、患者さんのがんから学ぶことが必須となり、今後、我々がヒトがんの本態を解明するためには、こうした基礎的がん研究と患者さんのがんの解析との間でのキャッチボールこそが必須のものとなっている。本セッションでは、「ヒトがん生物学が教えてくれるもの」と題して、近年、著しい進展を示しているがん生物学の分野で、優れた成果を創出している研究者の方々に、各分野における最新の知見と、それを通して見えてくる、ヒトがんの新たな理解についてお話しをしていただく。	オーガナイザー-1	野田 哲生	公益財団法人がん研究会がん研究所	所長	—
					オーガナイザー-2	宮園 浩平	国立研究開発法人 理化学研究所 東京大学大学院医学系研究科応用病理学	理事 卓越教授	—
		セッション形式	シンポジウム		座長1	野田 哲生	公益財団法人がん研究会がん研究所	所長	—
		セッション日時			座長2	宮園 浩平	国立研究開発法人 理化学研究所 東京大学大学院医学系研究科応用病理学	理事 卓越教授	—
		セッション時間	120分		演者1	小川 誠司	京都大学大学院医学研究科 腫瘍生物学講座	教授	がんの起源について
		聴講者	医師		演者2	佐藤 俊朗	慶應義塾大学医学部 坂口光洋記念講座（オルガノイド医学）	教授	オルガノイド研究が教えてくれるヒトがん
		席数			演者3	玉田 耕治	山口大学大学院医学系研究科免疫学講座	教授	ヒトがんの免疫生物学
		単位対象			演者4	渡部 徹郎	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科病態生化学分野	教授	がん微小環境の制御による新規治療法の開発
					演者5	広田 亨	公益財団法人がん研究会がん研究所実験病理部	部長	最新の染色体研究が教えてくれるヒトがんの分子機構
会頭特別企画	8	2040年を見据えた地域医療構想—我が国の医療供給体制の課題と未来への提言			オーガナイザー-1	門脇 孝	国家公務員共済組合連合会 虎の門病院	院長	—
					オーガナイザー-2	永井 良三	自治医科大学	学長	—
		セッション形式	シンポジウム		オーガナイザー-3	相澤 孝夫	一般社団法人日本病院会	会長	—
		セッション日時			座長1	永井 良三	自治医科大学	学長	—
		セッション時間	180分		座長2	相澤 孝夫	一般社団法人日本病院会	会長	—
		聴講者	医師		演者1	永井 良三	自治医科大学	学長	日本の医療提供体制の課題
		席数			演者2	迫井 正深	内閣官房 新型コロナウイルス等感染症対策室	室長	地域医療構想が目指すもの
		単位対象			演者3	荒井 正吾	奈良県	知事	地域医療構想—自治体の立場から
					演者4	今村 知明	厚生労働省地域医療構想に関するワーキンググループ／奈良県立医科大学公衆衛生学講座	構成員／教授	NDBやデータ分析から見た地域医療構想
					演者5	猪口 雄二	公益社団法人日本医師会	副会長	2040年に向けた地域医療構想のあり方
					演者6	相澤 孝夫	一般社団法人日本病院会	会長	地域医療構想—日本病院会の立場から
					演者7	大屋 祐輔	琉球大学病院	病院長	地域医療構想—全国医学部長・病院長会議の立場から
					演者8	猪熊 律子	読売新聞東京本社	編集委員	地域医療構想—メディアの立場から

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容		趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名(仮)
柱1 ビッグデータがもたらす医学・医療 の革新	1	顕微鏡ビッグデータは医学に何をもたらすか？		クライオ電子顕微鏡や、ライトシート顕微鏡、超解像顕微鏡、アレイトモグラフィなどによって自動取得される大量の3D、4Dの顕微鏡データは、構造生物学や細胞生物学といった基礎生命科学に留まらず、創薬・神経変性疾患の理解に大きな貢献をしつつある。こうした、ビッグデータを、どのように処理し、何が解明されるようになったのか、について最先端の結果を照会して頂きたい。また、将来、それを医学に役立てるために、何が必要なのかを議論したいと考えている。	オガナヅ-1	吉川 雅英	東京大学大学院医学系研究科 生体構造学分野	教授	—
		セッション形式	シンポジウム		オガナヅ-2	神谷 真子	東京大学大学院医学系研究科 医用生体工学講座生体情報学分野	准教授	—
		セッション日時			座長1	吉川 雅英	東京大学大学院医学系研究科 生体構造学分野	教授	—
		セッション時間	120分		座長2	神谷 真子	東京大学大学院医学系研究科 医用生体工学講座生体情報学分野	准教授	—
		聴講者	医師・学生		演者1	洲崎 悦生	順天堂大学大学院医学研究科 生化学・生体システム医科学	教授	組織・臓器の3次元観察がもたらす医学・医療の革新
		席数			演者2	太田 禎生	東京大学先端科学技術研究センター	准教授	ゴーストサイトメトリーによる高速・高精度細胞分析と新技術
		単位対象			演者3	奥野 恭史	京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻ビッグデータ医科学分野	教授	ビッグデータと難病—未診断疾患イニシアチブ(IRUD)の歩み—
					演者4	白水 美香子	理化学研究所 生命機能科学研究センター タンパク質機能・構造研究チーム	チームリーダー	クライオ電子顕微鏡によるタンパク質複合体構造解析
柱1 ビッグデータがもたらす医学・医療 の革新	2	AIが変える医学研究		細胞内分子動態、多種細胞間連関など、超多要素・大規模ネットワークを構成する基礎医学的データの集積が進み、それらを統合して動作原理を理解する上でAIの活用が不可欠となっている。また、分子動力学(MD)計算やマルチスケール・シミュレーションを実行するスーパーコンピュータは創薬の有力なツールとなりうる。さらにゲノム解析や全身網羅的トランスクリプトーム解析とAIの組み合わせなど医学研究へのAIの活用は、新たな多臓器間ネットワーク機構や病態の解明に繋がりが、創薬の飛躍的な進展をもたらしつつある。本テーマでは、医学研究におけるAI活用に焦点を当て、その現状ならびに将来の展望について議論する。	オガナヅ-1	浜本 隆二	国立がん研究センター研究所 医療AI研究開発分野	分野長	—
		セッション形式	スポンサードシンポジウム		オガナヅ-2	奥野 恭史	京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻ビッグデータ医科学分野	教授	—
		セッション日時			座長1	浜本 隆二	国立がん研究センター研究所 医療AI研究開発分野	分野長	—
		セッション時間	120分		座長2	奥野 恭史	京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻ビッグデータ医科学分野	教授	—
		聴講者	医師		演者1	松尾 豊	東京大学大学院工学系研究科 人工物工学研究センター／技術経営戦略学専攻	教授	深層学習の進展と医学研究への応用
		席数			演者2	本間 光貴	理化学研究所生命機能科学研究センター 制御分子設計研究チーム	チームリーダー	産学官連携による創薬AIプラットフォームの構築 実用的なAIを目指して(仮)
		単位対象			演者3	小林 和馬	国立がん研究センター研究所 医療AI研究開発分野	研究員	医師と共創するAI
					演者4	加山 博規	グーグル合同会社 AI for Japan		AIの医療応用
柱1 ビッグデータがもたらす医学・医療 の革新	3	シングルセルレベルで身体・病態を理解する		scRNA-seq解析や組織透明化技術、イメージング技術は近年急速に発展を遂げている。その恩恵により、様々な組織を1細胞レベルで遺伝子発現や局在分布を網羅的に理解できるようになり、免疫学や神経科学、発生・再生学など様々な基礎医学領域で不可欠な研究手法となり、またがんや白血病などの病態解明にも大きく貢献している。ヒトの全身における1細胞レベルでの遺伝子発現マップの作成が精力的に進む中、こうした情報がもたらす医学・医療への貢献と今後の展望を議論することは非常に意義高い。	オガナヅ-1	鈴木 穰	東京大学大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻生命システム観測分野	教授	—
		セッション形式	スポンサードシンポジウム		オガナヅ-2	茂呂 和世	大阪大学大学院医学系研究科感染症・免疫学講座生体防御学教室	教授	—
		セッション日時			座長1	鈴木 穰	東京大学大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻生命システム観測分野	教授	—
		セッション時間	120分		座長2	茂呂 和世	大阪大学大学院医学系研究科感染症・免疫学講座生体防御学教室	教授	—
		聴講者	医師・学生		演者1	鈴木 穰	東京大学大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻生命システム観測分野	教授	シングルセル解析から空間トランスクリプトーム解析へ
		席数			演者2	山岸 誠	東京大学大学院新領域創成科学研究科 メディカル情報生命専攻メディカルサイエンス講座		シングルセル解析技術の臨床検体への応用：血液がん
		単位対象			演者3	古屋 淳史	国立研究開発法人国立がん研究センター研究所 分子腫瘍学分野		シングルセル解析技術の臨床検体への応用：悪性リンパ腫
					演者4	野村 征太郎	東京大学医学部附属病院 循環器内科		シングルセル解析による心血管疾患の病態解明と臨床応用

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）		
柱1 ビッグデータがもたらす医学・医療 の変革	4	リアルワールドデータを用いた臨床研究・疫学 研究	近年、リアルワールドデータの基盤整備と利活用が急速に拡大している。データベース研究は介入研究と異なり、観察研究であるため交絡の問題が不可避である。因果推論のための研究デザインや応用統計手法の適用が欠かせない。膨大なデータを用いた仮説構築型、データ駆動型研究の推進も今後さらに発展が見込まれる。さらに機械学習や深層学習などの技術を用いた臨床予測モデルなどの開発やそれらを活用した診療支援などの技術革新も期待される。本セッションでは、進化するリアルワールドデータ研究について、各領域の専門家を交えて議論する。	オガナガ-1	大江 和彦	東京大学大学院医学系研究科 社会医学専攻医療情報学分野	教授	—		
				オガナガ-2	康永 秀生	東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻臨床疫学・経済学	教授	—		
				座長1	大江 和彦	東京大学大学院医学系研究科 社会医学専攻医療情報学分野	教授	—		
				座長2	康永 秀生	東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻臨床疫学・経済学	教授	—		
				演者1	田宮 菜奈子	筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野	教授	医療・介護・福祉サービスの向上のためのヘルスサービスリサーチ現場に根ざしたデータ活用		
				演者2	柏原 直樹	川崎医科大学腎臓内科 日本腎臓学会	教授 理事長	包括的慢性腎臓病データベース（J-CKD-DB）（仮）		
				演者3	宇山 佳明	独立行政法人医薬品医療機器総合機構 医療情報活用部	部長/疫学課長	MID-NETを活用した医薬品安全性評価（仮）		
				演者4	松山 裕	東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻生物統計学	教授	リアルワールドデータ研究における統計学的課題		
				演者5	山岡 裕司	富士通株式会社 富士通研究所 ブロックチェーンエコノミーPJ	主任研究員	個人情報保護法の匿名加工情報および加工技術		
				セッション形式	スポンサードシンポジウム					
セッション日時			<キーワード> リアルワールドデータ、データベース研究のデザイン、観察研究の統計学・因果推論、データ駆動型研究、機械学習・深層学習、など							
セッション時間	120分		<スポンサー企業> 富士通							
聴講者	医師・学生									
席数										
単位対象										
柱1 ビッグデータがもたらす医学・医療 の変革	5	ゲノム医療がもたらす未来	スポンサード企業：イルミナ	オガナガ-1	間野 博行	国立がん研究センター研究所	所長	—		
				オガナガ-2	山本 雅之	東北大学医学系研究科 医化学分野／東北メディカル・メガバンク機構	教授／機構長	—		
				座長1	間野 博行	国立がん研究センター研究所	所長	—		
				座長2	山本 雅之	東北大学医学系研究科 医化学分野／東北メディカル・メガバンク機構	教授／機構長	—		
				演者1	泉 陽子	東北メディカル・メガバンク機構		ゲノムコホート		
				演者2	河野 隆志	国立がん研究センター がんゲノム情報管理センター 情報利活用戦略室	室長	遺伝子パネル検査に基づくがんゲノム医療とデータ利活用		
				演者3	小崎 健次郎	慶應義塾大学医学部 臨床遺伝学センター	教授・センター長	未診断の難病患者に光を		
				演者4	John Chambers	PRECISE and Lead PI of SG100K	CSO	全ゲノム解析の医療展		
				セッション形式	スポンサードシンポジウム					
				セッション日時						
セッション時間	120分									
聴講者	医師									
席数										
単位対象										
柱1 ビッグデータがもたらす医学・医療 の変革	6	ビッグデータとAIを活用したQOLの向上と健康 寿命の延伸	健康寿命の指標としてQOLを客観的に診断し評価することが求められている。家庭内診断用センサーデバイスの開発や、ビッグデータ・AIを活用した生理パラメータの確立、QOLの見える化と患者の行動変容を促す取り組みと健康寿命の延長に必要な将来展望をテーマとする。	オガナガ-1	狩野 修	東邦大学医学部内科学講座 神経内科学分野	教授	—		
				オガナガ-2	真田 弘美	石川県立看護大学	学長	—		
				座長1	狩野 修	東邦大学医学部内科学講座 神経内科学分野	教授	—		
				座長2	真田 弘美	石川県立看護大学	学長	—		
				演者1	中川 敦寛	東北大学病院臨床研究推進センター/東北大学共創戦略センター	特任教授	健康寿命≒寿命への取組み：カギはデータ、デザインシンキング、テクノロジーのco-create		
				演者2	村上 義孝	東邦大学医学部社会医学講座 医療統計学分野	教授	ビッグデータの時代の健康寿命		
				演者3	仲上 豪二郎	東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻老年看護学／創傷看護学分野	准教授	AIスマートナーシングによる幸福寿命延伸への挑戦		
				演者4	亀井 智子	聖路加国際大学看護学研究科 老年看護学	教授	テレナーシングが切り拓く未来の在宅ケア		
				演者5	高尾 洋之	東京慈恵会医科大学 先端医療情報技術研究部	准教授	困っている人の体と心の健康寿命を延ばすアクセシビリティの活用		
				演者6	犬童 周作	デジタル庁 国民向けサービスグループ	次長	国のアクセシビリティ政策		
演者7	福井 小紀子	東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 総合保健看護学専攻 在宅ケア看護学	教授	看取り支援IoTによる質の高い終末期医療の構築						
セッション形式	シンポジウム									
セッション日時										
セッション時間	120分									
聴講者	医師・看護師									
席数										
単位対象										

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 番号	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名(仮)
柱2 革新的医療技術の最前線	1	免疫学が変えた医療	免疫学は天然痘ワクチンの開発に端を発し、これまで数多くの医療技術を生み出し人類の生存と福祉に貢献してきた。特に日本人研究者の功績は目覚ましく、抗原受容体の多様性、インターフェロン、サイトカイン、自然免疫・獲得免疫の制御など、医学・生命科学の進歩と共に分子レベルで解明が進んできた。自己免疫・炎症性疾患、アレルギー、がん、新興感染症、加齢関連疾患など、人類が克服すべき疾患の制御に向けて、免疫学に立脚した医療は今後もさらに重要な位置を占めるものと考えられる。本セッションでは、医療における免疫学の貢献について、これまでの歴史を総括するとともに、免疫学が未来の医療をどう変えられるか、今後の展望を議論する。	オガナガ-1	高柳 広	東京大学大学院医学系研究科 病因・病理学専攻免疫学分野	教授	—
				オガナガ-2	稲葉 カヨ	国立研究開発法人日本医療研究開発機構	監事	—
				座長1	高柳 広	東京大学大学院医学系研究科 病因・病理学専攻免疫学分野	教授	—
				座長2	稲葉 カヨ	国立研究開発法人日本医療研究開発機構	監事	—
				演者1	熊ノ郷 淳	大阪大学大学院医学系研究科 呼吸器・免疫内科学	教授	免疫学の進歩と医療の変革
				演者2	小澤 洋子	慶應義塾大学医学部眼科学教室	特任准教授	抗VEGF治療による失明疾患治療の変革
				演者3	山村 隆	国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 免疫研究部	部長	脳神経疾患における抗体医療の最前線
				演者4	松島 綱治	東京理科大学研究推進機構 生命医学研究所 炎症・免疫難病制御部門	教授	免疫による難治がんの克服：現在と将来
				演者5	高柳 広	東京大学大学院医学系研究科 病因・病理学専攻免疫学分野	教授	抗体医療が変えた骨関節疾患治療
				柱2 革新的医療技術の最前線	2	多臓器間ネットワークの理解に基づく医療応用	近年、免疫系、神経系、内分泌系、循環器系、消化器系、筋骨格系、呼吸器系など多岐にわたって様々な臓器間ネットワークの実態が明らかにされつつある。こうした多臓器連関による個体レベルでの生体制御、ならびにその破綻による病態誘導機構を理解し、新規診断法・治療法の開発に役立ることが今後の医療の発展に必要な時代となってきた。まさに分野横断型の連携を要する分野であり、医学会総会だからこそ成し得る包括的な議論が期待できる。	オガナガ-1
オガナガ-2	大谷 直子	大阪公立大学大学院医学研究科分子生体医学講座病態生理学(生理学第一)	教授					—
座長1	鍋島 陽一	京都大学大学院医学研究科健康加齢医学講座						—
座長2	大谷 直子	大阪公立大学大学院医学研究科分子生体医学講座病態生理学(生理学第一)	教授					—
演者1	金井 隆典	慶應義塾大学医学部消化器内科	医学部長・教授					多臓器連関における腸脳相関
演者2	眞鍋 一郎	千葉大学大学院医学研究院疾患システム医学	教授					臓器連関による心不全と多病の制御
演者3	大谷 直子	大阪公立大学大学院医学研究科分子生体医学講座病態生理学(生理学第一)	教授					腸内細菌叢と肝がん
演者4	石井 優	大阪大学大学院医学系研究科・生命機能研究科 免疫細胞生物学教室	教授					面積細胞動態による臓器連関の制御
演者5	村上 正晃	北海道大学遺伝子病制御研究所・大学院医学研究科分子神経免疫学	教授					新しい神経系と免疫系のクロストーク ゲートウェイ反射の発見
柱2 革新的医療技術の最前線	3	分子標的治療の現状と未来	低分子化合物による悪性腫瘍の標的治療はますます広がりを見せているが、根治をめざすものから、延命効果を持つものまで、その性格や使い方は多様である。自己免疫疾患などを中心に、非悪性腫瘍に対しても生物学的製剤を含む分子標的療法が数多く開発されている。このような分子標的療法の現在の到達点をまとめ、その臨床での役割や将来性とともに、副作用など管理上注意を要する点をまとめていただく。					オガナガ-1
				オガナガ-2	清井 仁	名古屋大学大学院医学系研究科 病態内科学講座 血液・腫瘍内科学	教授	—
				オガナガ-3	西野 和美	大阪国際がんセンター呼吸器内科	副部長	—
				座長1	田中 良哉	産業医科大学医学部第1内科学講座	教授	—
				座長2	清井 仁	名古屋大学大学院医学系研究科 病態内科学講座 血液・腫瘍内科学	教授	—
				座長3	西野 和美	大阪国際がんセンター呼吸器内科	副部長	—
				演者1	山岡 邦宏	北里大学医学部膠原病・感染内科学	主任教授	関節リウマチに対する分子標的治療の安全性と課題
				演者2	森信 暁雄	京都大学大学院医学研究科内科学講座臨床免疫学	教授	膠原病に対する分子標的治療の現状と展望
				演者4	前田 高宏	九州大学大学院医学研究院プレジジョン医療学分野	教授	造血器腫瘍臨床におけるプレジジョン医療
				演者5	山本 信之	和歌山県立医科大学呼吸器内科・腫瘍内科	教授	ドライバー癌遺伝子陽性肺癌up to date(皮疹マネジメントも含めて)
演者3	吉野 孝之	国立研究開発法人 国立がん研究センター 東病院消化器内科	科長	固形癌におけるがんゲノム医療・研究の現状と展望～ SCRUM-Japan Monstar-Screenの成果から紐解く～				

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）			
柱2 革新的医療技術の最前線	4	遠隔診断・モニタリングの実現に向けた医工連携技術 (Collaboration between engineering and medicine for telemedicine and remote monitoring)	遠隔診療や非対面診療の実現には家庭内で使用できる安価なデバイス、ウェアラブルデバイスの開発が求められる。また、どこまでの診療が可能かガイドラインの整備、診療情報システムの確立が求められる。デジタルヘルスの実現と地域格差の是正に向けた医療の在り方、さらには関連するSDGsの実現をテーマとする。	オガナイザ-1	染谷 隆夫	東京大学大学院工学系研究科 電気系工学専攻	教授	—			
				オガナイザ-2	南学 正臣	東京大学大学院医学系研究科 腎臓・内分泌内科	教授	—			
				座長1	染谷 隆夫	東京大学大学院工学系研究科 電気系工学専攻	教授	—			
				座長2	南学 正臣	東京大学大学院医学系研究科 腎臓・内分泌内科	教授	—			
				演者1	Birthe Dinesen	Aalborg University, Denmark	Professor	遠隔医療の未来像 Future perspectives of telemedicine			
				演者2	岸 暁子	東京大学大学院工学系研究科 バイオエンジニアリング専攻 個別化保健医療講座	特任助教	コネクテッド・ヘルスケアによる個別化対応を目指して			
				演者3	松久 直司	慶應義塾大学理工学部電気情報工学科	専任講師	超柔軟ウェアラブルデバイスによる最先端ヘルスケア			
				演者4	澤 智博	帝京大学医療情報システム研究センター	教授	遠隔診療を支える医療情報システム-AI・クラウド・IoTの可能性			
				演者5	香取 照幸	上智大学総合人間科学部社会福祉学科	教授	日本の医療行政における遠隔医療の課題			
				セッション形式	シンポジウム						
セッション日時											
セッション時間	120分										
聴講者	医師・学生										
席数											
単位対象											
柱2 革新的医療技術の最前線	5	工学的センシング技術を駆使した新たなバイオマーカーの開発	工学的センシングと臨床現場の掛け合わせにより、声、匂い、超音波などのモタリテを駆使した新たな疾患バイオマーカーの開発が進められている。モタリテを低侵襲・高感度に検出するモタリテセンサや、モタリテ診断の研究基盤が確立しつつある。疾患の予防、進行度、経過を感度よく反映する臨床的意義の深いマーカーについて焦点を当て、現状と未来像をテーマとする	オガナイザ-1	田畑 仁	東京大学大学院工学系研究科 バイオエンジニアリング専攻/電気系工学専攻	教授	—			
				オガナイザ-2	鄭 雄一	東京大学大学院医学系研究科 附属疾患生命工学センター 臨床医工学部門	教授	—			
				座長1	田畑 仁	東京大学大学院工学系研究科 バイオエンジニアリング専攻/電気系工学専攻	教授	—			
				座長2	鄭 雄一	東京大学大学院医学系研究科 附属疾患生命工学センター 臨床医工学部門	教授	—			
				演者1	檜山 聡	株式会社NTTDコムクロステック開発部		スマートフォンの利用データを用いた健康状態推定AIと健康行動変容への挑戦			
				演者2	吉川 元起	国立研究開発法人物質・材料研究機構 機能性材料研究開発拠点 電気・電子機能分野 嗅覚センサグループ	グループリーダー	嗅覚センサ-五感センサの最後のフロンティア-			
				演者3	申 ウソク	国立研究開発法人産業技術総合研究所 極限機能材料研究部門	副研究部門長	ヒトの匂いをかぎ分けるセンサ			
				演者4	徳野 慎一	神奈川県立保健福祉大学 ヘルスイノベーション研究科	教授	音声病態分析工学による精神神経疾患等の検出とモニタリング			
				演者5	東 隆	株式会社Lily MedTech	取締役/CTO	超音波3次元CTによる新たな乳がん診断装置の開発			
				セッション形式	シンポジウム						
セッション日時											
セッション時間	90分										
聴講者	医師										
席数											
単位対象											
柱2 革新的医療技術の最前線	6	生殖機能障害と不妊症・不育症治療の現在と未来	近年の晩婚化と少子高齢化にともない、不妊症や不育症に対する治療を受ける人が増加しており、不妊に悩む夫婦は10-15%とされる。このため、生殖医療の需要が高まっており、更なる医療技術の発展が望まれている。不妊症の原因は、排卵因子、卵管因子、子宮因子、頸管因子、免疫因子、男性因子など多岐にわたっており、原因不明な場合も多いこと、メンタルヘルスケアの重要性などもあり、産婦人科や泌尿器科をはじめとして、診療科横断的な観点から取り組む必要がある。また、近年の生殖医療の技術向上はめざましいが、医療費の高騰、長期的な安全性の問題、倫理面の問題など社会医学の観点からも解決すべき問題は多い。そこで、本テーマでは、不妊症・不育症に関連する医療に焦点を当て、現在の医療技術や問題点を整理し、さらには未来のサステイナブル社会実現に向けて議論を行いたい。	オガナイザ-1	苛原 稔	徳島大学大学院医歯薬学研究部	研究部長	—			
				オガナイザ-2	杉浦 真弓	名古屋市立大学大学院医学研究科 産科婦人科学	教授	—			
				座長1	苛原 稔	徳島大学大学院医歯薬学研究部	研究部長	—			
				座長2	杉浦 真弓	名古屋市立大学大学院医学研究科 産科婦人科学	教授	—			
				演者1	大須賀 穰	東京大学大学院医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻産婦人科学講座	教授	不妊症治療の現状と今後の展望			
				演者2	小川 毅彦	横浜市立大学大学院医学研究科 臓器再生医学	教授	重症生殖機能障害に対する未来の治療			
				演者3	北折 珠央	名古屋市立大学大学院医学研究科 産科婦人科学	講師	不育症診療の課題と展望			
				演者4	三上 幹男	東海大学医学部専門診療学系産婦人科	教授	少子化対策の一端を担っている生殖医療と倫理問題-開かれた社会・倫理面での議論の必要性-			
				セッション形式	シンポジウム						
				セッション日時							
セッション時間	90分										
聴講者	医師										
席数											
単位対象											

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名(仮)
柱2 革新的医療技術の最前線	7	生体膜バイオロジーの医学・医療への応用	(オーガナイザーからセッション趣旨変更) 細胞膜をはじめとする生体膜とそれを構成する脂質は、生命科学・医学において重要な役割を果たしている。脂質の代謝系の破綻は多岐に渡る疾患と関連し、例えば、肺が膨らむのに必要なサーファクタントの主要な成分は細胞膜のリン脂質と同一の分子である。長い間不明であった膜脂質の生成や分解のメカニズムや、生細胞と死細胞を区別する指標となる細胞膜リン脂質の非対称性を生み出す分子メカニズムも明らかになってきた。解析が困難であった細胞膜を観察する電子顕微鏡技術も大きく進展している。以上、脂質・生体膜バイオロジーは、今後の医学に果たす役割も大きくなっていると考え、テーマとして提案した。	オーガナイザー-1	横溝 岳彦	順天堂大学大学院医学研究科 生化学第一講座	教授	—
		セッション形式	シンポジウム	オーガナイザー-2	本田 郁子	東京大学大学院医学系研究科 分子生物学分野	特任講師	—
		セッション日時		座長1	横溝 岳彦	順天堂大学大学院医学研究科 生化学第一講座	教授	—
		セッション時間	90分	座長2	本田 郁子	東京大学大学院医学系研究科 分子生物学分野	特任講師	—
		聴講者	医師・学生	演者1	進藤 英雄	国立国際医療研究センター 脂質シグナリングプロジェクト	副プロジェクト長	膜を作る：リン脂質合成酵素の新展開
		席数		演者2	鈴木 淳	(主) 京都大学高等研究院 iCeMS / (副) 京都大学大学院生命科学研究科 細胞動態生化学	教授/教授	膜を裏返す：リン脂質スクランプリングとは？
		単位対象		演者3	森下 英晃	順天堂大学大学院医学研究科 生理学第二講座	講師	膜を壊す：オルガネラ膜消去のメカニズム
				演者4	白根 道子	名古屋市立大学大学院薬学研究科 分子生物薬学分野	教授	膜と疾患：オルガネラ膜接触部位と神経疾患
柱2 革新的医療技術の最前線	8	臓器代替技術の現状と新展開	人工臓器・再生医療・胚盤胞置換法など様々な臓器代替技術の開発が異分野融合で追求されている。従来の細胞移植・組織工学だけでなく、多細胞から成る臓器の構築やその移植を目指した研究の現状と未来像をテーマとする	オーガナイザー-1	清水 達也	東京女子医科大学 先端生命医科学研究所	所長・教授	—
		セッション形式	シンポジウム	オーガナイザー-2	武部 貴則	東京医科歯科大学統合研究機構 先端医歯工学創成研究部門	教授	—
		セッション日時		座長1	清水 達也	東京女子医科大学 先端生命医科学研究所	所長・教授	—
		セッション時間	120分	座長2	武部 貴則	東京医科歯科大学統合研究機構 先端医歯工学創成研究部門	教授	—
		聴講者	医師	演者1	武部 貴則	東京医科歯科大学統合研究機構 先端医歯工学創成研究部門	教授	オルガノイドを用いた器官創成への展望
		席数		演者2	須賀 英隆	名古屋大学大学院医学系研究科 糖尿病・内分泌内科学	准教授	iPS細胞を用いた内分泌系の臓器再生
		単位対象		演者3	関根 秀一	東京女子医科大学 先端生命医科学研究所	講師	組織灌流バイオリアクターを用いた臓器再生
				演者4	長嶋 比呂志	明治大学 農学部 生命科学科 メディカル・バイオエンジニアリング研究室	専任教授	ブタの利用による臓器再生・移植の現状と課題
				演者5	横尾 隆	東京慈恵会医科大学内科学講座 (腎臓・高血圧内科)	教授	胎児発生ニッチを用いた臓器再生
柱2 革新的医療技術の最前線	9	未来の手術器具・医療機器・ロボティクスデザイン	従来では実現できなかった、低侵襲かつ高精度な診療・治療を可能にする医療機器、スーパーマイクロサージャリーを実現する微細手術器具が開発されつつある。これら最先端の医療技術とその未来像をテーマとする。	オーガナイザー-1	長谷川 潔	東京大学大学院医学系研究科 臓器病態外科学 肝胆膵外科学 人工臓器・移植外科学	教授	—
		セッション形式	シンポジウム	オーガナイザー-2	宇山 一郎	藤田医科大学医学部 先端ロボット・内視鏡手術学	教授	—
		セッション日時		座長1	長谷川 潔	東京大学大学院医学系研究科 臓器病態外科学 肝胆膵外科学 人工臓器・移植外科学	教授	—
		セッション時間	120分	座長2	宇山 一郎	藤田医科大学医学部 先端ロボット・内視鏡手術学	教授	—
		聴講者	医師	演者1	浦野 泰照	東京大学大学院薬学系研究科 薬品代謝化学教室 東京大学大学院医学系研究科 生体情報学分野	教授	オリジナル蛍光プローブの開発による術中微小がんイメージングと治療応用
		席数		演者2	伊藤 雅昭	国立がん研究センター東病院/先端医療開発センター手術機器開発分野	大腸外科長/分野長	AIを活用した情報支援手術の開発
		単位対象		演者3	杉本 真樹	帝京大学沖永総合研究所Innovation Lab	教授	(仮)仮想空間を活用した最新デジタル医療：VR・ホログラム・5G・オンライン診療・遠隔手術支援
				演者4	宇山 一郎	藤田医科大学医学部 先端ロボット・内視鏡手術学	教授	国産手術支援ロボット「hinotori」による消化器外科におけるロボット手術と遠隔手術

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 番号	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
柱2 革新的医療技術の最前線	10	がんの抗体・免疫細胞治療	がんに対する免疫学的治療の発展が著しい。それらは大きく抗体医薬と免疫細胞治療に分けられる。抗体医薬も基本的なモノクローナル抗体から、薬剤結合型抗体、T cell engagerを含む多重特異性抗体へと開発は広がっている。また機能的には免疫チェックポイント阻害療法が重要な一角を占めてきている。一方、免疫細胞治療はCAR-T細胞療法などに代表され、その標的疾患と実用化の過程にはそれぞれ特徴がある。これらの治療法の臨床効果と今後の発展性についてまとめていただく。	オガナガ-1	河上 裕	国際医療福祉大学医学部医学部・免疫学	医学部長・教授	—
				オガナガ-2	保仙 直毅	大阪大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学	教授	—
				オガナガ-3	明石 定子	昭和大学医学部乳腺外科学部門	教授	—
				座長1	河上 裕	国際医療福祉大学医学部医学部・免疫学	医学部長・教授	—
				座長2	保仙 直毅	大阪大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学	教授	—
				座長3	明石 定子	昭和大学医学部乳腺外科学部門	教授	—
				演者1	河上 裕	国際医療福祉大学医学部医学部・免疫学	医学部長・教授	がん免疫療法の新展開：最新研究から臨床まで
				演者2	西川 博嘉	名古屋大学医学部分子細胞免疫学/国立がん研究センター 先端医療開発センター	教授/分野長	免疫チェックポイント阻害剤治療の新時代：ゲノム医療との融合
				演者3	中面 哲也	国立がん研究センター 先端医療開発センター 免疫療法開発分野	分野長	がんワクチン
				演者4	小林 久隆	NIH（米国立衛生研究所）/ NCI（国立がん研究所）		抗腫瘍抗体とその改良（武装化抗体Armed antibodyを中心に）
演者5	保仙 直毅	大阪大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学	教授	遺伝子改変 T細胞療法				
柱2 革新的医療技術の最前線	11	トランスポーター創薬 ～生理機能から治療へ～	現在まで、細胞内情報伝達系に関する分子や各種受容体などが治療・創薬の標的とされてきた。一方で、各種の疾患の発症や治療に、物質輸送系が関与することも多く報告されており、実際にSGLT2阻害薬などの細胞膜上の輸送担体（トランスポーター）を標的とした薬物も治療に用いられてきている。物質輸送系と病態発症・進行との関連、および新規な治療・創薬標的としてのトランスポーターについて最新の研究成果をご講演いただき、議論を進める。	オガナガ-1	金井 好克	大阪大学大学院医学系研究科 薬理学講座 生体システム薬理学	教授	—
				オガナガ-2	瀬川 博子	徳島大学大学院医歯薬学研究所 栄養科学部門医科栄養学系 応用栄養学分野	教授	—
				座長1	金井 好克	大阪大学大学院医学系研究科 薬理学講座 生体システム薬理学	教授	—
				座長2	瀬川 博子	徳島大学大学院医歯薬学研究所 栄養科学部門医科栄養学系 応用栄養学分野	教授	—
				演者1	金井 好克	大阪大学大学院医学系研究科 薬理学講座 生体システム薬理学	教授	グルコースとアミノ酸のトランスポーターを標的とした創薬
				演者2	高田 龍平	東京大学医学部附属病院薬剤部	講師・第一副部長	尿酸トランスポーターと創薬・薬物治療
				演者3	瀬川 博子	徳島大学大学院医歯薬学研究所 栄養科学部門医科栄養学系 応用栄養学分野	教授	リン酸トランスポーターの病態と創薬
				演者4	西澤 知宏	横浜市立大学生命医科学研究科 生体膜ダイナミクス研究室	教授	クライオ電顕で見えてくるトランスポーターとリガンドの相互作用
				演者5	西澤 知宏	横浜市立大学生命医科学研究科 生体膜ダイナミクス研究室	教授	クライオ電顕で見えてくるトランスポーターとリガンドの相互作用
				演者6	西澤 知宏	横浜市立大学生命医科学研究科 生体膜ダイナミクス研究室	教授	クライオ電顕で見えてくるトランスポーターとリガンドの相互作用
柱2 革新的医療技術の最前線	12	脳情報の解読に基づく脳神経疾患の治療戦略	神経変性疾患の患者数は社会の超高齢化に伴い増加しており、健康長寿社会の実現に向けて、神経疾患の治療法と予防法の開発は重要な課題である。近年のビックデータを基にした解析技術、データ駆動型サイエンス、数理工学の進歩により、脳情報が解読され遺伝子解析、AIやブレイン・マシン・インターフェイス（BMI）に活用されるようになった。これらにより、神経変性疾患の分子病態の解明が進み、早期診断や神経再生と機能回復の研究の道が開かれつつある。神経変性疾患の克服と失われた神経機能の再生および回復は重要なテーマであり、日本医学会所属分科会の領域横断的な融合研究の活性化にも繋がる。	オガナガ-1	辻 省次	国際医療福祉大学医学部	教授	—
				オガナガ-2	山下 祐一	国立精神・神経医療研究センター神経研究所 疾病研究第7部 2研究室	室長	—
				オガナガ-3	村松 里衣子	国立精神・神経医療研究センター神経研究所 神経薬理研究部	部長	—
				座長1	辻 省次	国際医療福祉大学医学部	教授	—
				座長2	山下 祐一	国立精神・神経医療研究センター神経研究所 疾病研究第7部 2研究室	室長	—
				座長3	村松 里衣子	国立精神・神経医療研究センター神経研究所 神経薬理研究部	部長	—
				演者1	村松 里衣子	国立精神・神経医療研究センター神経研究所 神経薬理研究部	部長	脳神経回路の修復メカニズム
				演者2	河原 行郎	大阪大学大学院医学系研究科 神経遺伝子学	教授	1細胞遺伝子発現解析に基づく神経変性疾患の病態解明と治療戦略
				演者3	岩田 淳	東京都健康長寿医療センター 脳神経内科	部長	神経細胞特異的情報抽出に基づくアルツハイマー病の新規病態解明
				演者4	一條 秀憲	東京大学大学院薬学系研究科 細胞情報学教室	教授	ALSの発症に関わるSOD1タンパク構造異常に基づく治療戦略
演者5	花川 隆	京都大学大学院医学研究科・医学部 高次脳科学講座 脳統合 イメージング分野	教授	神経変性疾患の多次元神経情報計測に基づく神経機能の制御戦略				

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名(仮)
柱2 革新的医療技術の最前線	13	liquid biopsyがもたらす可能性と課題	血液、尿などの体液サンプルを用いた低または非侵襲的な診断法はリキッドバイオプシーとよばれ、がん領域をはじめとした多様な臨床分野で、早期診断・治療法選択・個別化医療などに有用であると期待されており、既に2021年8月からがんの医療では保険適用され、臨床実装されている。 リキッドバイオプシーでは、解析対象がcirculating tumor cell, cell free DNA, microRNA, exosomeなど多岐にわたること、近年の測定技術や解析方法の進歩により多くの情報が得られることなどから、病態を把握するためのオミックス医療の分野とも深く関わる。このような現状を鑑み、リキッドバイオプシーがもたらす可能性と課題について、分野横断的に議論することは重要と考えられる。	オガナヰ-1	吉野 孝之	国立研究開発法人 国立がん研究センター 東病院消化管内科	科長	—
		セッション形式	スポンサーシンポジウム	オガナヰ-2	矢野 聖二	金沢大学医薬保健研究域医学系 呼吸器内科学	教授	—
		セッション日時		オガナヰ-3	星野 歩子	東京工業大学生命理工学院・生命理工学系	准教授	—
		セッション時間	120分	座長1	吉野 孝之	国立研究開発法人 国立がん研究センター 東病院消化管内科	科長	—
		聴講者	医師	座長2	矢野 聖二	金沢大学医薬保健研究域医学系 呼吸器内科学	教授	—
		席数		座長3	星野 歩子	東京工業大学生命理工学院・生命理工学系	准教授	—
		単位対象		演者1	David Spetzler	Caris Life Sciences	社長	Reimagine Cancer Detection, Diagnosis and Optimal Patient Management through the Power of Liquid Biopsy
				演者2	星野 歩子	東京工業大学生命理工学院・生命理工学系	准教授	エクソソームが切り拓く疾患生物学 ～病態機序の可視化が導く診断・治療の新たな可能性～
				演者3	中村 能章	国立がん研究センター東病院 消化器内科		リキッドバイオプシーマルチオミックスによるがん克服の可能性
				演者4	Philip Awadalla	Computational Biology, Ontario Institute for Cancer Research, Canada		Develop early-detection to support prevention of chronic disease
柱2 革新的医療技術の最前線	14	人工組織・オルガノイド・細胞エンジニアリングの医療応用	人工組織技術は再生医療の観点で様々な医療分野で注目が高い。一方、免疫、がんの分野では、CAR-T細胞療法の開発により、がんの治療体系が大きな変革を迎えている。ゲノム編集技術の開発も相成り、いまや、人工的に好きなように細胞を改変できる時代が訪れたと言える。医学と工学の連携が要となる分野横断的な医療技術でもあるため、人工細胞やオルガノイドに関する最先端の創出技術や次世代の医療のあり方について、多方面の分野の専門家を交えて議論することは有意義であると考えられる。	オガナヰ-1	高橋 政代	株式会社ビジョンケア	代表取締役社長	—
		セッション形式	シンポジウム	オガナヰ-2	佐藤 俊朗	慶應義塾大学医学部 坂口光洋記念講座(オルガノイド医学)	教授	—
		セッション日時		座長1	高橋 政代	株式会社ビジョンケア	代表取締役社長	—
		セッション時間	120分	座長2	佐藤 俊朗	慶應義塾大学医学部 坂口光洋記念講座(オルガノイド医学)	教授	—
		聴講者	医師	演者1	林 克彦	大阪大学大学院医学系研究科 ゲノム生物学講座(生殖遺伝学)	教授	生殖細胞系列の再構築と利用
		席数		演者2	高里 実	理化学研究所 生命機能科学研究センター ヒト器官形成研究チーム	チームリーダー	泌尿器系オルガノイド開発の最新
		単位対象		演者3	竹内 昌治	東京大学大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻	教授	細胞エンジニアリングによる三次元組織構築
				演者4	万代 道子	神戸アイセンター病院		網膜オルガノイドを用いた網膜変性の移植治療
				演者5	佐藤 俊朗	慶應義塾大学医学部 坂口光洋記念講座(オルガノイド医学)	教授	患者組織オルガノイドによるDisease Biology新展開
柱2 革新的医療技術の最前線	15	腸内細菌から見た新たな健康と医療	学会横断的なセッションとして、栄養、肥満、生活習慣病、消化器疾患(炎症性疾患、がん)、精神神経疾患の各領域での成果を概観した上で、将来の展望を共有する。提案をされている学会とキーワードとして、感染症学会(アウトライン)、栄養・食糧学会(プレシジョン栄養学)、大腸肛門病学会(消化管疾患)、肥満学会(肥満症・メタボリックシンドローム)、薬理学会(薬物治療)、心身医学会(脳腸相関・心身症)等があり、これに肝疾患、循環器領域や小児新生児での研究も余裕があれば含め、シンポジウム形式で行う。	オガナヰ-1	安藤 朗	滋賀医科大学 消化器内科	教授	—
		セッション形式	シンポジウム	オガナヰ-2	清水 俊明	順天堂大学医学部 小児科学講座	教授	—
		セッション日時		オガナヰ-3	新藏 礼子	東京大学定量生命科学研究所 免疫・感染制御研究分野	教授	—
		セッション時間	120分	座長1	安藤 朗	滋賀医科大学 消化器内科	教授	—
		聴講者	医師	座長2	清水 俊明	順天堂大学医学部 小児科学講座	教授	—
		席数		座長3	新藏 礼子	東京大学定量生命科学研究所 免疫・感染制御研究分野	教授	—
		単位対象		演者1	大野 博司	理化学研究所生命医科学研究センター 粘膜システム研究チーム	チームリーダー	腸内細菌代謝物と免疫・生体防御
				演者2	久田 研	順天堂大学医学部 小児科学講座	准教授	周産期・小児期における腸内細菌と健康
				演者3	内藤 裕二	京都府立医科大学大学院医学研究科 生体免疫栄養学	教授	長寿コホートから見えてきた腸内細菌と食
				演者4	中島 淳	横浜市立大学医学部医学科 肝胆膵消化器病学	教授	腸内細菌と生活習慣病

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容		趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
柱2 革新的医療技術の最前線	16	難病に対する遺伝子治療の推進		原因遺伝子が解明されている遺伝性の難病は、約5,000種類存在すると言われている。ゲノム医療は急速に拡大したことで、ゲノム医療としての遺伝子診断とともに、遺伝子治療が脚光を浴びているが、近年は、ゲノム編集技術の発展もあり、今後更なる臨床応用が期待されている。遺伝子治療は、既に発症した、あるいは発症が予想される疾患を対象とするが、近年、ウイルスベクターを用いた難治性疾患に対する正常遺伝子の導入などにおいて、その有効性や安全性をめぐる課題が解決されてきている。遺伝子診断・治療の広がりにより、今後は、一般診療医を含めた多くの医療従事者がこれらに関わる機会も多くなると予想され、本セッションが現状と今後の展望について理解を深める一助となることを期待している。	オガナイザ-1	松原 洋一	国立成育医療研究センター	理事	—
					オガナイザ-2	小崎 健次郎	慶應義塾大学医学部 臨床遺伝学センター	教授・センター長	—
		セッション形式	シンポジウム		オガナイザ-3	青木 洋子	東北大学大学院医学系研究科 公衆衛生学専攻 遺伝医療学分野	教授	—
		セッション日時			座長1	松原 洋一	国立成育医療研究センター	理事	—
		セッション時間	90分		座長2	小崎 健次郎	慶應義塾大学医学部 臨床遺伝学センター	教授・センター長	—
		聴講者	医師		座長3	青木 洋子	東北大学大学院医学系研究科 公衆衛生学専攻 遺伝医療学分野	教授	—
		席数			演者1	小野寺 雅史	国立成育医療研究センター遺伝子細胞治療推進センター	センター長	血液・免疫疾患の遺伝子治療
		単位対象			演者2	戸田 達史	東京大学大学院医学系研究科神経内科学分野	教授	成人神経筋疾患の遺伝子治療
					演者3	小島 華林	自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児科	講師	遺伝子治療で予後が激変する小児神経疾患：臨床応用と今後の展望
					演者4	堀田 秋津	京都大学IPS細胞研究所 臨床応用研究部門		ゲノム編集による次世代の遺伝子治療

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）	
柱3 人生100年時代に向けた医学と医療	1	認知症診療の現状と展望 ～アルツハイマー病の疾患修飾療法が現実味を帯びてきた中で～	認知症（特にアルツハイマー病）が増加している中で、病態が少しずつ明らかになり、多くのPhase3の失敗を乗り越えて、いよいよaducanumabなど疾患修飾薬の承認が現実味を帯びてきている。我々医学サイドだけでなく、国民の関心も非常に高く、臨床医学は、もちろん、基礎医学、社会医学にも大変重要なテーマである。	オガナザ-1	小野 賢二郎	金沢大学大学院医薬保健学総合研究科脳神経内科学 金沢大学附属病院 脳神経内科	教授	—	
		セッション形式		シンポジウム	オガナザ-2	木下 彩栄	京都大学医学研究科 人間健康科学系専攻 在宅医療・認知症学分野	教授	—
		セッション日時			座長1	小野 賢二郎	金沢大学大学院医薬保健学総合研究科脳神経内科学 金沢大学附属病院 脳神経内科	教授	—
		セッション時間		120分	座長2	木下 彩栄	京都大学医学研究科 人間健康科学系専攻 在宅医療・認知症学分野	教授	—
		聴講者		医師	演者1	岩坪 威	東京大学大学院医学系研究科 脳神経医学専攻 基礎神経医学講座	教授	アルツハイマー病研究の過去、現在、未来
		席数			演者2	小野 賢二郎	金沢大学大学院医薬保健学総合研究科脳神経内科学 金沢大学附属病院 脳神経内科	教授	アルツハイマー病の疾患修飾薬の現状と展望
		単位対象			演者3	木下 彩栄	京都大学医学研究科 人間健康科学系専攻 在宅医療・認知症学分野	教授	アルツハイマー病の発症予防・進行抑制を目指す生活介入
					演者4	繁田 雅弘	東京慈恵会医科大学 精神医学講座	主任教授	アルツハイマー病を支える社会関係資本とは
柱3 人生100年時代に向けた医学と医療	2	小児期から成人期へ切れ目ない医療連携～トランジション診療について～	医療や科学技術の進歩により、以前は救命できなかった小児疾患患者が成人となることが普通の時代となった。小児疾患特有の病態や治療に加えて、今後、これらの小児疾患の既往を有する患者も成人で発症する疾患が重なってくることも想定される。つまり、我々も想定していない未知の病態が生じてくると言っても過言ではない。 これからの未来の医療を考えた場合、小児期の疾患や受けた治療の理解をベースにして、成人診療科の考え方、アプローチにより、新たな病態が発見される可能性がある。それゆえ、単に小児科と成人診療科の地域医療連携が必要であることのみならず、新たな臨床医学分野や研究領域として考えなくてはならないかもしれない。このような発想で、脳神経、循環器、消化器、内分泌、呼吸器などの領域で、どのようなことが生じる可能性があるのか、未来の医療を予測したい。	オガナザ-1	松原 知代	獨協医科大学埼玉医療センター小児科	教授	—	
		セッション形式		シンポジウム	オガナザ-2	森岡 一朗	日本大学医学部小児科学系 小児科学分野	主任教授	—
		セッション日時			オガナザ-3	和田 和子	大阪母子医療センター新生児科	主任部長	—
		セッション時間		90分	座長1	松原 知代	獨協医科大学埼玉医療センター小児科	教授	—
		聴講者			座長2	森岡 一朗	日本大学医学部小児科学系 小児科学分野	主任教授	—
		席数			座長3	和田 和子	大阪母子医療センター新生児科	主任部長	—
		単位対象			演者1	窪田 満	国立成育医療研究センター 総合診療部	統括部長	成人移行支援の新しい考え方
					演者2	城戸 佐知子	兵庫県立こども病院 循環器内科	部長	心疾患患者の成人移行（小児病院と成人施設の協働）
					演者3	北畠 康司	大阪大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター	准教授	ダウン症の移行期治療 ～新たな臨床・研究領域として～
					演者4	杉山 由加里	社会医療法人宏潤会 だいでクリニック 在宅診療部		地域で支えていこう！移行期医療と「それ以降」
柱3 人生100年時代に向けた医学と医療	3	少子化と子どもの健康－社会医学・看護系の視点から	少子化に伴い、子供の健康を守るための種々のアプローチも近年徐々に変容しつつある。子どもの健康に関して、社会医学・看護系の視点から、特に小児・母性・家族看護の役割、精神保健・看護の役割（虐待、産後うつなど）なども重要である。 <キーワード> 少子化、子どもの健康、小児・母性・家族看護の役割、精神保健・看護の役割（虐待、産後うつなど）	オガナザ-1	岡 明	埼玉県立小児医療センター	病院長	—	
		セッション形式		シンポジウム	オガナザ-2	笠井 靖代	日本赤十字社医療センター 第二産婦人科	部長	—
		セッション日時			座長1	岡 明	埼玉県立小児医療センター	病院長	—
		セッション時間		90分	座長2	笠井 靖代	日本赤十字社医療センター 第二産婦人科	部長	—
		聴講者		医師・看護師	演者1	光田 信明	大阪母子医療センター	副院長	妊娠期から始まる虐待予防
		席数			演者2	笠井 靖代	日本赤十字社医療センター 第二産婦人科	部長	周産期におけるメンタルヘルスクア
		単位対象			演者3	荒木 暁子	東邦大学看護学部 小児看護学研究室	教授	障害児と家族の看護
					演者4	中村 伸枝	千葉大学大学院看護学研究院 看護学研究所・看護学部 先端実践看護学研究部門 高度実践看護学講座	教授	子どもの成長発達を支援する看護

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
柱3 人生100年時代に向けた医学と医療	4	健康長寿に関わるエビデンスの構築と医療政策への応用	健康長寿は社会的にも重要な課題である。健康長寿に対する政策的なアプローチとして、「健康日本21」など様々な施策が進められてきた。しかし、これまでの政策は必ずしも疫学・公衆衛生学的なエビデンスに基づいていない。一方で、健康長寿に関する国内外の疫学研究・臨床研究のエビデンスは次第に蓄積されつつある。本セッションでは、疫学・公衆衛生学および臨床の専門家を交え、フレイル・ロコモ・サルコペニア、認知症などに関するこれまでとこれからのエビデンス構築、およびそれらに基づく医療政策の在り方について議論する。	オガナヰ-1	吉村 典子	東京大学医学部附属病院 22世紀医療センター ロコモ予防学講座	特任教授	—
				オガナヰ-2	小川 純人	東京大学大学院医学系研究科 加齢医学講座老年病学	准教授	—
				座長1	吉村 典子	東京大学医学部附属病院 22世紀医療センター ロコモ予防学講座	特任教授	—
				座長2	小川 純人	東京大学大学院医学系研究科 加齢医学講座老年病学	准教授	—
				演者1	鈴木 隆雄	桜美林大学大学院	教授	長寿コホートに基づくフレイルの経時的変化
				演者2	吉村 典子	東京大学医学部附属病院 22世紀医療センター ロコモ予防学講座	特任教授	地域住民コホートからみたロコモティブシンドロームの疫学
				演者3	島田 裕之	国立長寿医療研究センター研究所 老年学・社会科学センター	センター長	認知症予防の現状のエビデンスとこれからの方向性
				演者4	津下 一代	女子栄養大学	特任教授	人生100年時代の健康行政・健診・保健事業のあり方
				セッション形式	シンポジウム			
セッション日時			<キーワード> 健康日本21、フレイル・ロコモ・サルコペニア、認知症など					
セッション時間	90分							
聴講者	医師							
席数								
単位対象	認定健康スポーツ医							
柱3 人生100年時代に向けた医学と医療	5	在宅医療・介護の制度改革およびテクノロジーの活用—より良い地域包括ケアシステムに向けて	地域包括ケアシステムとは、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援を目的とし、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるように、地域完結型の包括的な支援・サービスを提供する体制である。家族による介護機能が年々減退していく状況のもと、ケアの社会化を旨とし、高齢者の生活圏内で、訪問診療、訪問看護、訪問リハビリテーション、在宅歯科診療、訪問介護をはじめとする、在宅のままで受けられるサービスを充実させることを目指すものである。在宅医療・介護には家庭医が中心的な役割を果たす。高齢者の疾病や身体機能低下に伴う日常生活の不具合を発見してそれに対応する、身近で頼りになるかかりつけ医のシステムの普及も期待される。また、在宅医療・介護にあたっては、ICTやロボティクスなどのテクノロジーの活用も期待される。	オガナヰ-1	羽鳥 裕	公益社団法人日本医師会	前常任理事	—
				オガナヰ-2	武藤 真祐	医療法人社団鉄祐会	理事長	—
				座長1	江澤 和彦	公益社団法人日本医師会	常任理事	—
				座長2	武藤 真祐	医療法人社団鉄祐会	理事長	—
				演者1	蘆野 吉和	日本在宅医療連合学会	評議員	21世紀（2025年以降）の在宅医療のあり方
				演者2	阿部 智子	訪問看護ステーションけせら	統括所長	地域包括ケアにおける院内看護の役割の進化と変らぬもの
				演者3	武藤 真祐	医療法人社団鉄祐会	理事長	在宅医療におけるテクノロジーの未来
				演者4	真田 弘美	石川県立看護大学	学長	訪問看護のイノベーション
				セッション形式	シンポジウム			
セッション日時			<キーワード> 地域包括ケアシステム、訪問診療、訪問看護、訪問リハビリテーション、在宅歯科診療、在宅ケアとテクノロジー／ロボティクス、など					
セッション時間	120分							
聴講者	医師							
席数								
単位対象								
柱3 人生100年時代に向けた医学と医療	6	高齢者医療における領域横断的なフレイル・ロコモ対策	高齢化が急激に進むわが国の現状において、加齢が関係する運動器疾患が急増しており、加齢に伴う身体能力や運動器機能の低下が社会問題となっている。近年、このようなフレイル・ロコモの概念や構成要素が明らかとなり、今後はこれらに対する研究、病態解明、評価法、治療法の開発などが重要な課題である。フレイル・ロコモの予防や対策においては、健康寿命延伸の観点から認知症や生活習慣病などを含めた領域横断的な取り組みが重要である。	オガナヰ-1	松井 康素	国立長寿医療研究センター ロコモフレイルセンター ロコモフレイル診療部	センター長兼部長	—
				オガナヰ-2	安藤 富士子	愛知淑徳大学健康医療科学部 スポーツ・健康医科学科	教授	—
				座長1	松井 康素	国立長寿医療研究センター ロコモフレイルセンター ロコモフレイル診療部	センター長兼部長	—
				座長2	安藤 富士子	愛知淑徳大学健康医療科学部 スポーツ・健康医科学科	教授	—
				演者1	中村 耕三	医療法人社団大坪会東和病院／東京大学大学院医学系研究科・医学部（整形外科）	病院長／ 名誉教授	元気な長寿であるためのロコモ・フレイル対策 80GO（ハチマルゴー）運動
				演者2	飯島 勝矢	東京大学高齢社会総合研究機構／東京大学未来ビジョン研究センター	機構長／教授	フレイルの社会的アプローチ
				演者3	大江 隆史	NTT東日本関東病院／ロコモ チャレンジ！推進協議会	院長／委員長	ロコモのPRと医療による取り組み
				演者4	大沢 愛子	国立長寿医療研究センター リハビリテーション科部 リハビリテーション科	医長	フレイル・ロコモのリハビリテーション
				セッション形式	シンポジウム			
セッション日時								
セッション時間	90分							
聴講者	医師							
席数								
単位対象	認定健康スポーツ医							

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容		趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
柱3 人生100年時代に向けた医学と 医療	7	行動変容による疾病の予防と健康寿命の延伸 ー改めて国民の心を動かすためにはー		超高齢社会においては健康寿命の延伸は喫緊の課題といえる。健康寿命の延伸を阻害する疾病としては生活習慣病、がんがあげられ、認知症、フレイル対策も注目されている。医療の進歩により健康寿命の延伸が図られつつあるが、行動変容による疾病の予防、健診・検診による早期発見、早期治療が重要な課題となっている。行動変容による各疾患の予防と治療に関する積極的な取り組みと総合的な議論が健康寿命の延伸につながるものと期待される。	オガナザ-1	飯島 勝矢	東京大学高齢社会総合研究機構 / 東京大学未来ビジョン研究センター	機構長/教授	ー
		セッション形式	シンポジウム		オガナザ-2	田村 好史	順天堂大学国際教養学部国際教養学科	教授	ー
		セッション日時			オガナザ-3	小熊 祐子	慶應義塾大学スポーツ医学研究センター・大学院健康マネジメント研究科	准教授	ー
		セッション時間	90分		座長1	飯島 勝矢	東京大学高齢社会総合研究機構 / 東京大学未来ビジョン研究センター	機構長/教授	ー
		聴講者	医師		座長2	田村 好史	順天堂大学国際教養学部国際教養学科	教授	ー
		席数			座長3	小熊 祐子	慶應義塾大学スポーツ医学研究センター・大学院健康マネジメント研究科	准教授	ー
		単位対象	認定健康スポーツ医		演者1	田村 好史	順天堂大学国際教養学部国際教養学科	教授	健康寿命延伸に関するエビデンスと課題
					演者2	山田 実	筑波大学人間系	教授	健康寿命延伸に向けたフレイル対策
					演者3	野口 緑	大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座	特任准教授	行動変容を可能にする指導介入の考え方
					演者4	小熊 祐子	慶應義塾大学スポーツ医学研究センター・大学院健康マネジメント研究科	准教授	社会全体の行動変容をシステムズアプローチで考える
柱3 人生100年時代に向けた医学と 医療	8	老化の本態解明と健康長寿		健康長寿社会の形成は、健康医療戦略の大きな柱の一つとなっている。細胞、臓器、個体レベルでの老化の本態を明らかにし、その成果を疾患横断的な観点から応用することが、健康長寿社会の実現に資すると考える。近年、従来からの老化研究の枠を超えて、シングルセル解析、細胞系譜解析、オルガノイド技術、マルチオミックス、モデル動物などを駆使した新しいアプローチが加わり、癌の発生を含む老化の本態が見直されつつある。健康長寿に向けた新しい疾患予防戦略へと繋がること期待されている。	オガナザ-1	岡野 栄之	慶應義塾大学医学部・生理学教室	教授	ー
		セッション形式	シンポジウム		オガナザ-2	西村 栄美	東京大学医科学研究所 老化再生生物学分野	教授	ー
		セッション日時			座長1	岡野 栄之	慶應義塾大学医学部・生理学教室	教授	ー
		セッション時間	120分		座長2	西村 栄美	東京大学医科学研究所 老化再生生物学分野	教授	ー
		聴講者	医師		演者1	岡野 栄之	慶應義塾大学医学部・生理学教室	教授	幹細胞技術を用いた再生医療と創薬研究
		席数			演者2	小川 誠司	京都大学大学院医学研究科 腫瘍生物学講座	教授	クローン進化と老化・がん
		単位対象			演者3	今井 真一郎	ワシントン大学医学部 発生生物学部門・医学部門	教授	サーチュインと老化の本態解明
					演者4	西村 栄美	東京大学医科学研究所 老化再生生物学分野	教授	皮膚の幹細胞から解く老化の本態
					演者5	吉森 保	大阪大学医学研究科・医学部 遺伝学教室	教授	オートファジー：老化に対抗する細胞の守護者
		柱3 人生100年時代に向けた医学と 医療	9		人生100年時代の社会情勢の変化と労働 環境の変容に対応した産業保健の変革		「労働と健康」は古くて新しい概念である。旧来、産業衛生は公衆衛生学における重要課題の一つであり続けている。近年は社会経済状況の変化に伴って人々の働き方も変容し、非正規雇用の増加、失業と就労支援なども課題となっている。わが国では2019年の労働基準法改正に伴い、仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)を主眼に置いた働き方改革がすでに始まっている。また、差別の撤廃の重要性が再認識され、同一労働同一賃金、女性の働き方、男女共同参画、ダイバーシティ、などにも注目が集まっている。こうした社会情勢の変化・労働環境の変容に対応し、産業保健の変革も迫られている。	オガナザ-1	刈田 香苗
セッション形式	シンポジウム			オガナザ-2	神村 裕子	公益社団法人日本医師会		常任理事	ー
セッション日時				座長1	刈田 香苗	杏林大学医学部衛生学公衆衛生学		教授	ー
セッション時間	120分			座長2	神村 裕子	公益社団法人日本医師会		常任理事	ー
聴講者	医師			演者1	川島 史子	株式会社クラウドクリニック/株式会社PLUS F		代表取締役/代表取締役社長	多様な力を活かしてインクルーシブな社会の実現へ～在宅医療の現場を支える仕組みづくりからみえてきたもの～
席数				演者2	西 賢一郎	ジヤトコ株式会社人事部門		統括産業医	多様な働く人々の健康ーダイバーシティ・両立支援マネジメントのすすめー
単位対象	認定産業医 生涯研修			演者3	野原 理子	東京女子医科大学医学部医学科 衛生学公衆衛生学		教授	女性就労者支援と働き方改革
				演者4	堀江 正知	産業医科大学産業生態科学研究所 産業保健管理研究室		教授	多様な働き方と産業保健

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 番号	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
柱3 人生100年時代に向けた医学と医療	10	超高齢社会における生活習慣病対策－歯科の立場から	生活習慣病対策には、予防から治療まで様々なアプローチがある。そのうち、歯科的な予防的アプローチも重要である。 <キーワード> 医科歯科連携, 歯周病, 口腔ケア	オガナイザ-1	尾松 素樹	公益社団法人日本歯科医師会	常務理事	－
				オガナイザ-2	星 和人	東京大学大学院医学系研究科 外科学専攻感覚・運動機能医学講座 口腔顎顔面外科学	教授	－
				座長1	尾松 素樹	公益社団法人日本歯科医師会	常務理事	－
				座長2	星 和人	東京大学大学院医学系研究科 外科学専攻感覚・運動機能医学講座 口腔顎顔面外科学	教授	－
				演者1	相田 潤	東京医科歯科大学大学院 健康推進歯学分野	教授	第74回WHO総会の歴史的な口腔保健の決議の日本での意義とは？
				演者2	恒石 美登里	日本歯科総合研究機構	主任研究員	歯数と認知症の関係（仮）
				演者3	小方 頼昌	日本大学松戸歯学部／特定非営利活動法人 日本歯周病学会	学部長／理事長	歯周病の新分類、発症と進行へのウイルスの関与と歯周組織再生療法
				演者4	西田 互	にじわたる糖尿病内科	院長	口腔ケアから始まる人生100年対策～糖尿病から認知症まで～
				演者5	星 和人	東京大学大学院医学系研究科 外科学専攻感覚・運動機能医学講座 口腔顎顔面外科学	教授	医科歯科連携による生活習慣病予防
				柱3 人生100年時代に向けた医学と医療	11	終末期医療の諸課題と各職種の役割	緩和ケアは、生命に関わる病気をわずらう患者とその家族に対し、疼痛その他の身体的問題のみならず、精神的・社会的問題を早期に発見し、それらに伴う苦しみを和らげ、QOLを維持・改善するアプローチである。がん緩和ケアのみならず非がんの緩和ケアの普及も今後の課題である。終末期における患者の意思決定においては、リビング・ウィルやアドバンス・ケア・プランニング(ACP)などの検討が進められている。ACPIは、患者本人や家族と医療・介護チームが話しあい、終末期の医療・介護の方針を決めるものである。終末期医療においては、医師だけでなく、歯科医師、看護師などの他職種の役割も重要となる。 <キーワード> 緩和ケア、ACP、看護の役割、歯科の役割、など	オガナイザ-1
オガナイザ-2	橋口 さおり	聖マリアンナ医科大学緩和医療学講座	教授					－
座長1	山本 則子	東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 高齢者在宅長期ケア看護学／緩和ケア看護学分野	教授					－
座長2	橋口 さおり	聖マリアンナ医科大学緩和医療学講座	教授					－
演者1	浜野 淳	筑波大学附属病院総合診療科	病院教授・講師					アドバンス・ケア・プランニングを実施する適切な時期と与語予測
演者2	竹内 麻理	慶應義塾大学医学部精神・神経科／緩和ケアセンター	講師					ACP推進のための院内体制の整備と効果的な院内教育
演者3	松本 佐知子	日本赤十字看護大学さいたま看護学部老年看護学領域						高齢者ケア施設でのEOLケアの質改善に向けた取り組み
演者4	高砂 裕子	横浜市南区医師会訪問看護ステーション	管理者					在宅緩和ケア～訪問看護の実践から～
演者5	高野 龍昭	東洋大学ライフデザイン学部 生活支援学科	准教授					要介護高齢者のACP支援と介護領域での看取り
柱3 人生100年時代に向けた医学と医療	12	超高齢社会における生活習慣病のprecision medicine -ゲノム医療などの観点から-	precision medicineとは、患者を遺伝子やバイオマーカーなどでグループ分けした上で適切な治療を行うというもので、治療の有効性を高めるばかりでなく医療経済的にも優れたコンセプトである。がん診療においては、ドライバー遺伝子の解析後分子標的治療を行うといったprecision medicineがすでに行われ大きな成果を上げている。一方がん以外の生活習慣病、例えば糖尿病、心筋梗塞、心房細動、腎臓病、COPDなどはその発症に環境要因が大きく関与するが、遺伝的要因も重要である。そこで将来的には、がん以外の生活習慣病においても、遺伝子やバイオマーカー、さらにはAIによる生活習慣のグループ化による個別治療が重要になっていくと考えられる。					オガナイザ-1
				オガナイザ-2	小室 一成	東京大学大学院医学系研究科 循環器内科学	教授	－
				オガナイザ-3	斯波 真理子	大阪医科薬科大学 循環器センター		－
				座長1	門脇 孝	国家公務員共済組合連合会 虎の門病院	院長	－
				座長2	小室 一成	東京大学大学院医学系研究科 循環器内科学	教授	－
				座長3	斯波 真理子	大阪医科薬科大学 循環器センター		－
				演者1	鎌谷 洋一郎	東京大学大学院新領域創成科学研究科 複雑形質ゲノム解析分野	教授	複雑形質としての生活習慣病とプレジジョンメディスン
				演者2	山内 敏正	東京大学大学院医学系研究科 糖尿病・代謝内科	教授	2型糖尿病・合併症のゲノム解析と精密医療の実装
				演者3	斯波 真理子	大阪医科薬科大学 循環器センター		脂質異常症のprecision medicine
				演者4	伊藤 薫	理化学研究所生命医科学研究センター 循環器ゲノミクス・インフォマティクス研究チーム	チームリーダー	虚血性心疾患のゲノム解析とプレジジョンメディスンの実現
演者5	岡田 随象	大阪大学大学院医学系研究科 遺伝統計学	教授	これからのゲノム創薬とプレジジョンメディスン				

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 番号	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
柱4 持続可能な新しい医療システムと 人材育成	1	医療・介護の経済・財政的課題の改善に向けて	わが国の基礎的財政収支（プライマリーバランス）はマイナスになっており、財政赤字は累積している。2019年には公債残高が約897兆円に達している。財政赤字の原因の一つとして、社会保障関係費の増大が挙げられる。医療・介護システムの持続可能性（Sustainability）を担保するために、医療費適正化が常に議論の俎上にあげられている。個別の問題としては、高額医薬品の問題も顕在化しており、医療経済評価の視点も近年重視されるようになりつつある。本セッションでは医療・介護の経済・財政的課題について各方面の専門家を交えた議論を行う。特に、進歩を続ける医療技術を活用した医療サービス提供を具現化する上での、経済的視点からの可能性・限界についても考察する。	オガナヅ-1	野口 晴子	早稲田大学政治経済学術院	教授	—
				オガナヅ-2	井深 陽子	慶應義塾大学経済学部医療経済学	教授	—
				座長1	野口 晴子	早稲田大学政治経済学術院	教授	—
				座長2	井深 陽子	慶應義塾大学経済学部医療経済学	教授	—
				演者1	鷲見 学	厚生労働省医政局地域医療計画課	課長	医療介護行政
				演者2	飯塚 敏晃	東京大学大学院経済学研究科	教授	医療政策の課題（仮）
				演者3	田宮 菜奈子	筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野	教授	持続可能な医療・介護システムに向けたヘルスサービスリサーチ — 治し支える医療における医療介護のエビデンス
				演者4	伊藤 由希子	津田塾大学総合政策学部総合政策学科	教授	医療・介護の経済分析（仮）
				演者5	土居 丈朗	慶應義塾大学経済学部	教授	医療・介護給付の財源確保のあり方
柱4 持続可能な新しい医療システムと 人材育成	2	医工連携・融合に向けた教育改革・環境整備	医療の発展には医工連携・融合が必須であるが、日本においてその教育・環境は十分とはいえない。今後の産・官・学の融合促進に向けた教育改革・環境整備の現状や将来あるべき未来像をテーマとする。融合研究における最新の成果をモデルケースとして議論する場としたい。	オガナヅ-1	佐久間 一郎	東京大学大学院工学系研究科バイオエンジニアリング専攻医用精密工学研究室	教授	—
				オガナヅ-2	永富 良一	東北大学大学院医工学研究科	研究科長・教授	—
				座長1	佐久間 一郎	東京大学大学院工学系研究科バイオエンジニアリング専攻医用精密工学研究室	教授	—
				座長2	永富 良一	東北大学大学院医工学研究科	研究科長・教授	—
				演者1	杉浦 清了	株式会社UT-Heart研究所	社長	心臓シミュレータによる診断・治療支援
				演者2	木村 芳孝	みやぎ県南中核病院	副院長	医工 数学連携から生まれた胎児心電図装置
				演者3	原田 香奈子	東京大学大学院医学系研究科疾患生命工学センター-医療材料・ 機器工学部門	准教授	分野横断研究によるAIロボット開発
				演者4	永富 良一	東北大学大学院医工学研究科	研究科長・教授	医工連携教育におけるデザイン思考の意義
				柱4 持続可能な新しい医療システムと 人材育成	3	今日の臨床・研究におけるELSI（Ethical, Legal and Social Issues）	ELSIは「ethical, legal, and social implications」の略で、日本では「倫理的・法的・社会的な課題」と訳される。科学技術の進歩は大きな社会的影響があるが、新たな種類の影響については法律が整備されていないことが多く、ELSIの議論が重要となる。欧米では研究開発にELSIを組み込むことは戦略上重要と捉えられており、日本でも省庁は大規模な研究費にELSIの対応を求める方針としている。しかしながら日本ではELSI自体の認知がまだまだ進んでいないのが現状である。そこで医学会総会でも、日本におけるELSIの現状および今後の課題について議論することに大きな意味があると考えられる。	オガナヅ-1
オガナヅ-2	藤尾 圭志	東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻 アレルギー・リウマチ 学	教授					—
座長1	藤垣 裕子	東京大学大学院総合文化研究科 広域科学専攻 広域システム 科学系	教授					—
座長2	藤尾 圭志	東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻 アレルギー・リウマチ 学	教授					—
演者1	小林 傳司	大阪大学COデザインセンター／大阪大学／JST社会技術研究開 発センター	特任教授／名誉教授 ／センター長					なぜ、今ELSIか：内閣府ムーンショット研究開発事業ELSI分 科会主査として
演者2	八代 嘉美	神奈川県立保健福祉大学 ヘルスイノベーション研究科	教授					社会とともに再生医療を創るために考えておくべきこと
演者3	瀬戸山 晃一	京都府立医科大学大学院医学研究科 医学生命倫理学	教授					ゲノム解析研究と遺伝子検査の発展による遺伝子差別と法規 制
演者4	井上 悠輔	東京大学医科学研究所 公共政策研究分野	准教授					医療におけるAI関連技術の利活用を考える
演者5	井上 悠輔	東京大学医科学研究所 公共政策研究分野	准教授					医療におけるAI関連技術の利活用を考える

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容		趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
柱4 持続可能な新しい医療システムと 人材育成	4	医療人の教育の現状と今後の在り方		医療専門職の育成にあたっては、医学教育に関する研究の発展およびその成果の普及が不可欠となる。コロナ禍に対応する形で、Webを用いた授業や実習など、医学教育の在り方も変容し、その成果の評価も待たれる。特に医学生の教育においては、スチューデント・ドクター（Student Doctor: SD）になるための能力を測定するコンピュータ客観試験（CBT）や客観的臨床能力試験（OSCE）などの仕組みが導入されている。さらに医学部教育のカリキュラム・イノベーションやアクティブ・ラーニングの方式の採用、医師研究者の育成、医師の生涯教育など、医学生や医療人の教育は不断に進歩している。本セッションでは、医療人の教育の現状と今後について、幅広い領域の識者を交えて議論する。	オガナイザ-1	江頭 正人	東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 医学教育学部門	教授	—
					オガナイザ-2	福井 小紀子	東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 総合保健看護学専攻 在宅ケア看護学	教授	—
		セッション形式	シンポジウム		座長1	江頭 正人	東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 医学教育学部門	教授	—
		セッション日時			座長2	福井 小紀子	東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 総合保健看護学専攻 在宅ケア看護学	教授	—
		セッション時間	120分		演者1	小西 靖彦	静岡県立総合病院	病院長	卒前の医学教育の現状と今後—医学教育モデル・コア・カリキュラムの改定のねらいも含めて—
		聴講者	医師		演者2	山脇 正永	東京医科歯科大学 臨床医学教育開発学分野	教授	卒前・卒後のシームレスな医療人養成について
		席数			演者3	堀内 成子	聖路加国際大学	学長	教育者を育成する新しい看護学大学院課程の展望
		単位対象			演者4	酒井 郁子	千葉大学大学院看護学研究科 看護学研究科・看護学部 先端実践看護学研究部門 高度実践看護学講座	教授	医師と看護師の協働による特定行為研修が創造する医療提供システムの構築
					演者5	藤倉 輝道	日本医科大学医学教育センター 医学教育研究開発部門	部門長・教授	医療者教育におけるDX—ポストコロナの教育現場はいかに変貌するか
柱4 持続可能な新しい医療システムと 人材育成	5	安全への先行的アプローチ			オガナイザ-1	中村 京太	横浜市立大学附属市民総合医療センター 医療の質・安全管理部	部長・診療教授	—
					オガナイザ-2	山本 知孝	東京大学医学部附属病院 医療評価・安全部	准教授	—
		セッション形式	シンポジウム		座長1	中村 京太	横浜市立大学附属市民総合医療センター 医療の質・安全管理部	部長・診療教授	—
		セッション日時			座長2	山本 知孝	東京大学医学部附属病院 医療評価・安全部	准教授	—
		セッション時間	120分		演者1	中村 京太	横浜市立大学附属市民総合医療センター 医療の質・安全管理部	部長・診療教授	チームの力を活かして創る医療安全
		聴講者	医師		演者2	山本 知孝	東京大学医学部附属病院 医療評価・安全部	准教授	現場が主役の安全マネジメント
		席数			演者3	木村 壯介	一般社団法人 日本医療安全調査機構	常務理事	医療事故調査制度（医療事故の再発防止の観点から）
		単位対象	共通講習（医療安全）		演者4	中島 和江	大阪大学医学部附属病院 中央クオリティマネジメント部	教授・部長 病院長補佐	レジリエンスの発揮を通じた医療の質・安全の向上
					演者5	後 信	九州大学病院 医療安全管理部	部長・教授	医療安全の国際潮流
					演者6	滝沢 牧子	群馬大学医学部附属病院 医療の質・安全管理部	副部長	あたらしい医療安全教育へのチャレンジ
柱4 持続可能な新しい医療システムと 人材育成	6	医療人の働き方に関わる諸課題とその対策		2019年3月に厚生労働省「医師の働き方改革に関する検討会」は、2024年4月から「医師の時間外労働上限規制」を適用すること等を骨子とする提言をまとめた。医師の働き方改革の実現に当たっては、医師の健康の確保と地域医療提供体制の維持の両立を目指すことが明示されている。これらに関連して、医師のキャリアパス、医師以外の多職種との協働、医療者の働きがいなどについても検討が必要である。また昨今のコロナ禍での医療者差別の問題など、医療者を取り巻く状況には新たな問題も出てきている。本セッションでは、これらの論点について包括的に議論する。	オガナイザ-1	木戸 道子	日本赤十字社医療センター 第一産婦人科	部長	—
					オガナイザ-2	和田 耕治	国際医療福祉大学医学部 公衆衛生学	教授	—
		セッション形式	シンポジウム		座長1	木戸 道子	日本赤十字社医療センター 第一産婦人科	部長	—
		セッション日時			座長2	和田 耕治	国際医療福祉大学医学部 公衆衛生学	教授	—
		セッション時間	120分		演者1	鈴木 幸雄	横浜市立大学産婦人科（現在コロンビア大学へ留学中）	助教	医師のキャリアの新たな可能性を考える
		聴講者	医師・看護師		演者2	荒川 梨津子	石巻赤十字病院産業医	産業医	医師の働き方改革をより良い医療につなぐ～産業医の立場から
		席数			演者3	横手 幸太郎	千葉大学医学部附属病院	病院長	大学病院の立場から考える働き方改革の課題と可能性
		単位対象			演者4	大澤 秀一	平成立石病院	院長	医師の働き方改革の実践～コロナ禍を経験した病院管理者の立場から～
					演者5	井本 寛子	公益社団法人日本看護協会	常任理事	組織で取り組むタスクシフト／シェア

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容		趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
柱4 持続可能な新しい医療システムと 人材育成	7	持続可能な開発目標(SDGs)とグローバル・ヘルス		世界では貧困や人権に関わる諸問題が山積しており、各国が連携してそれらに対処する指標として「持続可能な開発目標(SDGs)」の17ゴールが定められ、2030年までの達成が目指されている。SDGsでは、国、自治体、企業、アカデミア、そして個人に至るまで、すべての人々の行動が求められている。特に目標3「保健」では、「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」という重要テーマが掲げられている。これに関連するグローバル・ヘルス(global health)の課題として、universal health coverage(すべての人々が適切な予防・治療・リハビリテーション等の保健医療サービスを必要な時に支払い可能な費用で受けられること)、ディーセント・ワーク(権利が保護され、十分な収入を生み、適切な社会保護が供与された生産的仕事)、経済格差と健康格差、気候変動と健康、など多岐にわたるテーマが挙げられる。本セッションでは、持続可能な開発目標に関連する健康・医療上の課題について、多方面の専門家を交え、学際的な議論を行う。演者は取り上げる個別テーマの視点から問題提起を各10分ほど行い、あとは座長のよるファシリテーションによる対話形式のディスカッションとする。医学界に関連したSDGは国民皆保険という固定化された視点ではなく、SDGsの背景にある持続可能な開発という大きな流れを前提として、2020年国連75周年報告にもある五大潮流(地球温暖化、少子高齢化、都市化、情報技術の革新、不平等)と、新型コロナウイルス感染症などを踏まえつつ、近未来の日本の医療のあり方について、各界の第一人者を迎えて議論する。 <キーワード> 持続可能な開発目標(SDGs)、グローバル・ヘルス、universal health coverage、経済格差と健康格差、ディーセント・ワーク、気候変動と健康、など	オカナイザ-1	中村 桂子	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 国際保健医療事業開発学分野	教授	—
		セッション形式	シンポジウム		座長1	中村 桂子	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 国際保健医療事業開発学分野	教授	—
		セッション日時			座長2	森 臨太郎	国連人口基金・アジア太平洋地域事務所	地域アドバイザー (人口高齢化と持続可能な開発)	—
		セッション時間	90分		演者1	島崎 謙治	国際医療福祉大学大学院 医療福祉経営専攻 医療経営管理分野	教授	国民皆保険、社会経済が変容するなかで維持できるか？
		聴講者			演者2	佐藤 摩利子	国際移民機関(IOM) 事務局長室アジア担当 / 前・国連人口基金駐日事務所	所長	医療の現場にジェンダー平等を：命を繋ぐ「からだの自己決定権」
		席数			演者3	藻谷 浩介	日本総合研究所調査部	主席研究員	住み続けられるまちづくりに向けて、地域の医療体制の未来は？
		単位対象			演者4	児玉 知子	国立保健医療科学院	上席主任研究官	SDG8：働きがいも成長も！—人材育成の視点から—
					パネリスト1	大田 えりか	聖路加国際大学国際看護学	教授	(講演はなくフィールドの視点から議論に参加)

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
柱5 パンデミック・大災害に対抗するイノベーション立国による挑戦	1	パンデミック感染症や災害に対する医学・医療環境の構築	限られた時間・場所・物資の制約の下、より良い医療を提供するためには、医工連携を駆使した医療環境の構築が求められる。ワクチン開発、災害医療アプリ、避難所での診断・医療体制、遠隔医療の実現など、医工連携にスポットライトを当てた災害時の研究・医療設備の現状と未来像をテーマとする。	オガナイザ-1	杉山 温人	国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院	病院長	—
				オガナイザ-2	阿南 英明	藤沢市民病院	副院長	—
				座長1	杉山 温人	国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院	病院長	—
				座長2	阿南 英明	藤沢市民病院	副院長	—
				演者1	満倉 靖恵	慶應義塾大学理工学部・理工学研究科システムデザイン工学科	教授	災害時の避難所におけるストレスの簡易取得と睡眠の簡易 5段階評価
				演者2	高木 俊介	横浜市立大学附属病院集中治療部	部長	パンデミック時の遠隔ICUの可能性
				演者3	佐々木 亮	国立国際医療研究センター病院救命救急センター	救急科診療科長	ICTを活用したパンデミック時の災害医療対応
				演者4	出雲 雄大	日本赤十字社医療センター 呼吸器内科	部長	新型コロナウイルス感染症パンデミックにおける呼吸器感染症診療～変わりゆく状況の中で最適解を求めて～
柱5 パンデミック・大災害に対抗するイノベーション立国による挑戦	2	感染症予防の究極的手段としての予防接種	人類は、有史以前より多くの感染症に苦しめられてきた。これまでに予防接種が普及し、ワクチンは天然痘の根絶など感染症を制御あるいは撲滅させる手段として大きな威力を發揮してきた。しかし、この数十年、我々は種々の新興・再興感染症に遭遇しており、感染症の予防手段として予防接種の重要性はさらに高まっている。感染症の歴史とともに、ワクチンは新しい技術とともに進歩しており、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）においても、mRNAワクチンなどの新技術が導入され、接種による効果が強く期待されている。しかしながら、長期的な安全性の確認に加え、国際的なワクチン普及の格差など解決すべき課題も多い。本セッションでは、感染症予防における最新のトピック、今後の課題や展望について議論したい。	オガナイザ-1	大曲 貴夫	国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 国際感染症センター	センター長	—
				オガナイザ-2	長尾 美紀	京都大学大学院医学研究科 臨床病態検査学	教授	—
				座長1	齋藤 昭彦	新潟大学医学部小児科学教室	教授	—
				座長2	長尾 美紀	京都大学大学院医学研究科 臨床病態検査学	教授	—
				演者1	氏家 無限	国立国際医療研究センター 国際感染症センター	トラベルクリニック医長	ワクチン接種による新型コロナウイルス感染症への影響
				演者2	石井 健	東京大学医学研究所 感染・免疫部門 ワクチン科学分野	教授	ワクチンを100日で届けるには？
				演者3	青山 恭規	塩野義製薬株式会社	上席執行役員・医薬研究本部長	CODIV-19ワクチンの開発・改良の実際_2 企業の立場から
				演者4	西辻 浩	内閣府 健康・医療戦略推進事務局	事務局長	ワクチン開発戦略の実行について—政府のワクチン戦略
柱5 パンデミック・大災害に対抗するイノベーション立国による挑戦	3	社会からの隔絶「ソーシャルディスタンス」の医学	新型コロナウイルス感染防止対策として「ソーシャルディスタンス」という言葉が広まったが、本来「ソーシャルディスタンス」とは、親近感や敵対感などの人間の心理的な距離を示す概念であり、社会的孤立の程度や個人・集団間の親密度を意味する。そのため世界保健機関（WHO）は、「フィジカルディスタンス（物理的距離）」に言い換えるよう推奨しており、国内でもその動きが広まりつつある。しかし、コロナ禍における失職や休校、他者との社会的接触の制限などにより、社会的孤立は深刻化しており、真の「ソーシャルディスタンス」にも目を向ける必要が生じている。また、人間は幼年期、思春期に適切な社会経験をすることが、生涯にわたる人格形成、情動の安定化、社会性の獲得に大きな影響を与えることが近年明らかとなり、こうした研究は虐待、ネグレクト、引きこもりなどの社会問題とも深く関係する。基礎医学研究において社会隔離ストレスによる脳機能への影響の神経回路基盤的メカニズムが近年躍進的に明らかになってきている一方で、精神科領域でも社会的隔離ストレスの問題点や対処法などが提唱されつつあり、医学研究・医療・社会医学が関わるテーマとして医学会総会で議論することは非常に有意義であると考えられる。	オガナイザ-1	宮田 麻理子	東京女子医科大学 生理学講座・神経生理学分野	教授	—
				オガナイザ-2	古屋敷 智之	神戸大学大学院医学研究科薬理学分野	教授	—
				座長1	古屋敷 智之	東京女子医科大学 生理学講座・神経生理学分野	教授	—
				座長2	宮田 麻理子	神戸大学大学院医学研究科薬理学分野	教授	—
				演者1	川名 明彦	防衛医科大学校内科学講座（感染症・呼吸器）	教授	ソーシャルディスタンスは感染対策上有効か？
				演者2	館田 一博	東邦大学医学部 微生物・感染症学講座	教授	ソーシャルディスタンスを含めた感染対策が、実際の診療の現場に与えた影響
				演者3	森口 佑介	京都大学文学部行動文化学専攻 行動文化学講座	准教授	コロナ禍における子どもの社会性の発達
				演者4	古屋敷 智之	神戸大学大学院医学研究科薬理学分野	教授	社会的ストレスによるこころの病に迫る：基礎医学研究の最前線
演者5	山脇 成人	広島大学 脳・こころ・感性科学研究センター	特任教授	ソーシャルディスタンスに配慮したWith/Postコロナ時代のメンタルヘルス対策				

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 番号	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
柱5 パンデミック・大災害に対抗するイノベーション立国による挑戦	4	COVID-19をめぐるコミュニケーションの諸相		オーガナイザ-1	—			—
				オーガナイザ-2	—			—
				座長1	大曲 貴夫	国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 国際感染症センター	センター長	—
				座長2	四柳 宏	東京大学医学研究所先端医療研究センター感染症分野 東京大学医学研究所附属病院	教授 病院長	—
				演者1	忽那 賢志	大阪大学大学院医学系研究科感染制御医学講座（感染制御学）	教授	COVID-19時代の情報収集・発信の在り方
				演者2	市川 衛	Healthcare Journalist/READYFOR株式会社 基金開発・公共政策／一般社団法人メディカルジャーナリズム勉強会	客員准教授	COVID-19とInfodemic
				演者3	奈良 由美子	放送大学教養学部・大学院生活健康科学プログラム	教授	COVID-19とリスクコミュニケーション
				演者4	磯野 真穂	東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所	フェロー	医療人類学からみたCOVID-19とコミュニケーション
				演者5	武藤 香織	東京大学	教授	医療社会学からみたCOVID-19とコミュニケーション
柱5 パンデミック・大災害に対抗するイノベーション立国による挑戦	5	ポストコロナの保健医療システムの在り方	<p>コロナ禍において、密の回避、テレワークの推奨、雇用・家庭環境の変容など、人々の生活様式は大きな変化を余儀なくされている。保健医療分野においても、人々の受療行動の変化、社会的な負の影響に伴う健康障害や自殺の増加なども懸念されている。本学会が開催される2023年に、コロナ禍によるストレスフルな状況が収束あるいは継続しているのか、予測はできない。しかし、コロナ禍の経験を通じて、パンデミックに対応する保健医療システムの在り方などについて、多くの教訓が得られるはずである。</p> <p><キーワード> コロナ禍およびその後の生活様式の変化（テレワーク・雇用・家庭環境など）とその影響（受療行動の変化、健康障害・自殺等）、それらに対応するシステムづくり、など</p>	オーガナイザ-1	宮田 裕章	慶應義塾大学医学部 医療政策・管理学	教授	—
				オーガナイザ-2	西浦 博	京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 環境衛生学分野	教授	—
				座長1	宮田 裕章	慶應義塾大学医学部 医療政策・管理学	教授	—
				座長2	西浦 博	京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 環境衛生学分野	教授	—
				演者1	森山 美知子	広島大学大学院医系科学研究科成人看護開発学	教授	ポストコロナの保健医療システムのありかた
				演者2	飯田 大輔	社会福祉法人福祉楽団	理事長	コロナ禍でみえた生活過程を整える介護・看護の未来
				演者3	宮田 裕章	慶應義塾大学医学部 医療政策・管理学	教授	デジタル革命の先にある新しい社会
				演者4	鈴木 寛	東京大学公共政策大学院	教授	ポストコロナ時代における社会システムの未来
				柱5 パンデミック・大災害に対抗するイノベーション立国による挑戦	6	社会的システムとしての救急・災害医療—レジリエンスを高めるシステムの検討	<p>救急医療は公共財であり、病院前・病院内・退院後の一連のサービスを提供できる社会的システムの一部として位置づけられなければならない。また、災害医療では、平時に行われる救急医療と同レベル医療提供体制を敷くことは困難である。緊急事態下の情報共有の在り方を検討し、平時から準備体制を整えておくことも肝要である。また、想定外に多数の傷病者が発生し、医療需要が供給を大きく上回る状況でもできるだけ医療崩壊とならないよう、医療システムのレジリエンスを平時から高める仕組みを検討しなければならないだろう。本セッションでは、救急医療・災害医療や危機管理など多方面の専門家を交え、医療のレジリエンスをキーワードに、学際的な議論を行う。</p> <p><キーワード> 危機管理、災害医療、緊急事態下の情報共有、平時からの準備体制、レジリエントな医療システム、など</p>	オーガナイザ-1
オーガナイザ-2	大友 康裕	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 救急災害医学分野	教授					—
座長1	久保 達彦	広島大学大学院医系科学研究科 公衆衛生学	教授					—
座長2	大友 康裕	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 救急災害医学分野	教授					—
演者1	久保 達彦	広島大学大学院医系科学研究科 公衆衛生学	教授					日本発WHO国際標準 J-SPEED - 東日本大震災の教訓が生み出した国際イノベーション
演者2	市川 学	芝浦工業大学システム理工学部 環境システム学科	准教授					災害時保健医療福祉活動支援システム-D24H-
演者3	近藤 久禎	厚生労働省DMAT事務局	次長					新型コロナウイルス感染症パンデミックにDMATは如何に戦ったか？
演者4	小倉 崇以	済生会宇都宮病院 栃木県救命救急センター	センター長					ECMO Co-ordination : Rapid Response ECMO systemの稼働とECMO搬送体制の確立

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 番号	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名(仮)
U40委員会企画	1	医療/医学におけるチームビルディング -コミュニケーションとリーダーシップスキルを再考する-	医療現場では、様々な職種が含まれるチームが協働して診療にあたるが、異なる職種であるが故に違った考えを持ち、チーム間で同じビジョンを共有できていないこともある。医学研究を行う研究室においては、学生も教員もより良い研究を行うことを目指しているはずであるが、アカデミックハラスメントと呼ばれる案件は未だに存在し、双方を悩ませている。医療現場においてはどのようなチームビルディングが望ましいだろうか、そして研究室においての健全なコミュニケーションとはどのようなものだろうか。本セッションにおいては、最初に問題事例の提示を行い、それに対する打開策を各講演で提示することで実践的な内容とするともに、今後のチームビルディング・コミュニケーションに役立つ前向きな内容を重点的に扱う。	オガナヰ-1	松田 諭	慶應義塾大学医学部外科学（一般・消化器）	助教	-
				オガナヰ-2	菅原 有佳	東京大学医学部附属病院 腎臓・内分泌内科	特任助教	-
	セッション形式	シンポジウム		座長1	森下 英晃	順天堂大学大学院医学研究科 生理学第二講座	講師	医療現場におけるミスコミュニケーション事例
	セッション日時			座長2	宮城 悦子	横浜市立大学医学部産婦人科学教室	主任教授	研究室におけるミスコミュニケーション事例
	セッション時間	90分		演者1	上野 直人	テキサス大学 MDアンダーソンがんセンター・乳腺腫瘍内科部門	教授	Vision Missionに基づきリーダーシップスキルとコミュニケーション
	聴講者	医師		演者2	熊谷 晋一郎	東京大学先端科学技術研究センター当事者研究分野	准教授	医療界における理想的なリーダーシップと組織文化とは
	席数			演者3	横山 美栄子	広島大学 ハラスメント相談室	名誉教授	アカハラと「熱心なしどう」を分けるもの - 研究室におけるコミュニケーション再考 -
U40委員会企画	2	Organ/Multiorgans-on-a-Chipの現在と未来	医薬品候補化合物の安全性や薬物動態を評価するための新たな方法として、チップ等のデバイス上で各種臓器オルガノイドを培養するOrgan/Multiorgans-on-a-Chipに関する研究が進んでいる。本シンポジウムでは、本領域をリードする若手研究者を中心に、さまざまな角度からOrgan/Multiorgans-on-a-Chip研究の現状と課題、今後の展望に関して議論する。	オガナヰ-1	遠山 周吾	慶應義塾大学医学部循環器内科	専任講師	-
				オガナヰ-2	原田 龍一	東北大学大学院医学系研究科 機能薬理学分野	助教	-
	セッション形式	シンポジウム		座長1	杉本 昌弘	東京医科大学低侵襲医療総合開発センター	教授	-
	セッション日時			座長2	福田 淳二	横浜国立大学大学院工学研究院 機能の創生部門	教授	-
	セッション時間	120分		演者1	西川 昌輝	東京大学大学院工学系研究科 化学システム工学専攻環境反応化学講座	講師	前駆細胞を活用したKidney-on-a-Chipの開発
	聴講者			演者2	前田 和勲	九州工業大学 大学院生命化学情報工学研究系		肝臓のzonationを考慮した薬物代謝動態の数理モデル
	席数			演者3	木村 啓志	東海大学 マイクロ・ナノ研究開発センター	教授	Organ/Multiorgans-on-a-Chipの実用化に向けた取り組み
	単位対象		演者4	高山 和雄	京都大学IPS細胞研究所 増殖分化機構研究部門	講師	肺チップおよび肝臓チップの開発と創薬応用	
			演者5	松崎 典弥	大阪大学大学院工学研究科 応用科学専攻	教授	血液脳関門（BBB）スクリーニングデバイスの創製	
U40委員会企画	3	将来に向けた医学研究評価のあり方について考える	日本学術会議から出された提言「学術の振興に寄与する研究評価を目指して～望ましい研究評価に向けた課題と展望～」の作成に携わった専門家をお招きし、提言の概要についてご講演いただく。次に研究評価についての研究分野「科学計量学」に基づく最新の知見を学ぶ。また、COVID-19対応でも注目され公衆衛生の主導的立場にある米国CDCにおける研究評価について紹介する。加えてU40委員ら有志で行う「将来に向けた医学研究評価のあり方についての調査」の結果を報告し、ディスカッションを行う。	オガナヰ-1	杉山 雄大	国立国際医療研究センター研究所 糖尿病情報センター 医療政策研究室 / 筑波大学医学医療系ヘルスサービスマニエーション分野	室長 / 教授	-
				オガナヰ-2	福島 紘子	筑波大学医学医療系小児科	講師	-
	セッション形式	シンポジウム		座長1	杉山 雄大	国立国際医療研究センター研究所 糖尿病情報センター 医療政策研究室 / 筑波大学医学医療系ヘルスサービスマニエーション分野	室長 / 教授	-
	セッション日時			座長2	福島 紘子	筑波大学医学医療系小児科	講師	-
	セッション時間	120分		演者1	高瀬 堅吉	中央大学 文学部 人文社会学科 心理学専攻 / 文学研究科 心理学専攻 自治医科大学 医学部	教授 客員研究員	日本学術会議からの提言についての概要～学術の振興に寄与する研究評価を目指して～
	聴講者	医師		演者2	林 和弘	科学技術・学術政策研究所 データ解析政策研究室	室長	オープンサイエンスで変わる医学研究と研究評価
	席数			演者3	Meda Pavkov	Lead, Epidemiology Team, Surveillance, Epidemiology, Economics and Statistics Branch, Centers for Disease Control and Prevention		Research evaluation at the CDC - protecting the public from health threats / 米国CDCにおける研究評価-健康の脅威から国民を守るために
	単位対象		演者4	箕浦 明	昭和大学医学部衛生学公衆衛生学講座	助教	U40委員「将来に向けた医学研究評価のあり方についての調査」報告	

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
U40委員会企画	4	AIは医師を置き換えるか？～医療AIの未来 予想図～	人工知能（AI）は、いまやスマートフォンにも搭載され、わたしたちの生活になくてはならない存在である。医療はAIの重要な開発ターゲットであり、既にAIホスピタルプロジェクトは社会実装が始まり、自然言語処理によるAI医療支援システムやAI創薬の実現もみえてきた。AIがヒトを上回るタスクを利用すれば、AIによる科学・医学のブレークスルーが期待でき、将来はAIが医師を置き換えるのではないかと意見がある。しかし、AIは医師の心も置き換えられるのだろうか？AIは使っても使われてはならない。医療AIの社会実装を支点として、AIが50年後、100年後の医療をどう変えるか、未来像を議論したい。なお、各先生方にはご講演の最後に、ご自身の領域でAIは医師を置き換えるかどうか、私見をまとめていただく。	オガナヅ-1	津山 直子	がん研究会がん研究所 病理部	特任研究員	—
		セッション形式	シンポジウム	オガナヅ-2	紺野 大地	東京大学大学院薬学系研究科 薬品作用学教室	博士課程4年	—
		セッション日時		座長1	津山 直子	がん研究会がん研究所 病理部	特任研究員	—
		セッション時間	120分	座長2	紺野 大地	東京大学大学院薬学系研究科 薬品作用学教室	博士課程4年	—
		聴講者		演者1	津山 直子	がん研究会がん研究所 病理部	特任研究員	病理部門におけるdigital transformation
		席数		演者2	河添 悦昌	東京大学大学院医学系研究科 医療AI開発学講座	特任准教授	医療とデータ駆動型研究を効率化するAIによる自然言語処理
		単位対象		演者3	森脇 由隆	東京大学大学院農学生命科学研究科 応用生命工学専攻 生物情報工学研究室	助教	タンパク質構造予測ソフトウェアAlphaFold2によって加速されるAI創薬
				演者4	紺野 大地	東京大学大学院薬学系研究科 薬品作用学教室	博士課程4年	脳AI融合の最前線と医師の未来
				演者5	柳澤 琢史	大阪大学高等共創研究院	研究室主任 教授	Brain-Computer Interfaceによる脳AI融合の医療応用
				演者6	岸本 泰士郎	慶應義塾大学医学部 ヒルズ未来予防医療ウエルネス共同研究講座	特任教授	AIは心の病を診ることができるか？
U40委員会企画	5	U40が考える働き方改革後の未来～組織 運営と現場の声は合致するのか？建前と本 音を議論する～	2024年4月より医師にも働き方改革が適用される。これまで自己犠牲のもとで無尽蔵に働いてきた医師の働き方に対する考えはここ数年で大きく変化してきている。医療事故やヒヤリ・ハットは長時間労働時に多く発生している報告があり、医療安全の観点からも働き方改革は重要である。また、特に大病院における兼業・副業については、個人の収益、生活にも影響する可能性が指摘されている。実際、働き方に対する考えは多種多様であり、将来女性医師割合が増加すること、価値観のdiversity（仕事重視なのかQOL重視なのか）などこれらは未来を見据えて検討していかなければならない問題であり、働き方改革はそういった制度であると考えられる。しかしながら、医療現場では管理側の本音とU40世代の現場で働く若手医師の間で働くことに対する考え方や捉え方は必ずしも一致していないかもしれない。我々に課せられた使命は真に国民が幸福を感じられる医療体制の構築と医学の発展であり、これらを達成するために一度腹を割って本音と建前を率直に話し合える場をつくることを目標とする	オガナヅ-1	北川 雄光	慶應義塾 慶應義塾大学医学部外科学	常任理事 教授	—
		セッション形式	シンポジウム	オガナヅ-2	小松 宏彰	鳥取大学医学部附属病院 女性診療科群	講師	—
		セッション日時		座長1	北川 雄光	慶應義塾 慶應義塾大学医学部外科学	常任理事 教授	—
		セッション時間	120分	座長2	小松 宏彰	鳥取大学医学部附属病院 女性診療科群	講師	—
		聴講者	医師	演者1	山田 悠史	マウントサイナイ医科大学 老年医学科	Assistant professor	医師の働き方改革の問題点と展望～日本と米国の違い～
		席数		演者2	高橋 泰	国際医療福祉大学大学院 医療福祉経営専攻医療経営管理分野	教授	働き方改革の終着点の展望
		単位対象		演者3	的場 優介	Department of Obstetrics and Gynecology, Vincent Center for Reproductive Biology, Massachusetts General Hospital		U40から見た働き方改革—Work to live, Live to work—
				演者4	田中 千陽	東邦大学医療センター 佐倉病院 外科	講師 日本心臓血管外科学会U-40代表	U-40世代の女性外科医として考える技術習得のための工夫とタイムマネジメント
				演者5	大隅 典子	東北大学大学院医学系研究科 発生発達神経科学分野 東北大学	教授/ 副学長	WLBを踏まえて、働く女性が活躍するために
				演者6	調 憲	群馬大学大学院医学研究科総合外科学講座肝胆膵外科分野	教授	働き方改革後の外科医育成における「不易流行」は何か？
U40委員会企画	6	基礎・臨床・社会医学の連携と融合～脳領 域を例として～	医学の世界は日進月歩であり、21世紀に入ってからの変化も目まぐるしい。20年前に治験段階や発達上だった薬剤やデバイスの多くは実用化され、各種デジタルデバイスの進歩は臨床・研究・教育・日常生活いずれの場面でも欠かせないものとなった。また、介護保険制度や臨床研修制度などといった制度面の変遷は著しく、医療業界に多大な影響を与えた出来事は数多く、病名変更により医療から社会へ働きかけた例もあるなど、社会情勢に関連した変化もめまぐるしい。そうした情勢の中で開かれる今回の日本医学会総会では、幅広い分野を網羅したメンバーで構成されたU40委員会が初結成された。医療の今後の発展には、自らの専門分野を高めることはもちろん、他分野との連携(リエゾン)がこれまで以上に重要性を増すことは明らかである。本シンポジウムは、基礎系・社会系・臨床系のU40メンバー有志が、脳と多領域連携を軸に今後の展望を語るべく企画した。脳血管障害は今昔ともに日本における主要な疾患の1つであるほか、高齢化著しい日本において認知症等の神経変性疾患は大きな課題であることは言うまでもない。分子イメージング、神経炎症、公衆衛生、ニューロサイエンス、精神医療など、脳領域における話題と将来性についてU40メンバーから提示する。その後、脳領域をキーワードとして異分野・多領域連携のセレンディピティの可能性についてフロアと語り合いたい。	オガナヅ-1	大矢 希	京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学	病院助教	—
		セッション形式	シンポジウム	オガナヅ-2	森豊 隆志	東京大学医学部附属病院 臨床研究推進センター	センター長 教授	—
		セッション日時		座長1	大矢 希	京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学	病院助教	—
		セッション時間	120分	座長2	森豊 隆志	東京大学医学部附属病院 臨床研究推進センター	センター長 教授	—
		聴講者	医師	演者1	原田 龍一	東北大学大学院医学系研究科 機能薬理学分野	助教	分子イメージングのトランスレーショナルリサーチ
		席数		演者2	伊藤 美菜子	九州大学生体防御医学研究所アレルギー-防御学分野 / 慶應義塾大学医学部微生物学・免疫学教室	准教授 特任准教授	神経免疫の基礎研究と臨床現場をつなぐ
		単位対象		演者3	桑原 恵介	帝京大学大学院公衆衛生学研究科 国立国際医療研究センター 疫学・予防研究部	講師 特任研究員	国民のメンタルヘルス改善につながる医療について考える
				演者4	高野 浩司	大阪国際がんセンター脳神経外科	医長	脳卒中臨床現場委の変遷と将来展望～他分野連携の視点から～
				演者5	大矢 希	京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学	病院助教	リエゾン(連携)の利点を精神医学の立場から考察する
				指定発言	森豊 隆志	東京大学医学部附属病院 臨床研究推進センター	センター長 教授	指定発言

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 番号	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
U40委員会企画	7	若手研究者が拓く再生医療の未来	ヒトIPS細胞は細胞移植治療における細胞源であり、既に多くの領域においてヒトIPS細胞を用いた再生医療の臨床応用が現実のものとなりつつある。既に臨床応用されている、あるいは臨床応用間近のプロジェクトにおいて、実用化のKeyとなる技術を確認してきた若手研究者を中心にシンポジウムを企画し、この先再生医療をどのように展開させていくかに関して横断的に議論する。	オガナガ-1	遠山 周吾	慶應義塾大学医学部循環器内科	専任講師	—
		セッション形式	シンポジウム	オガナガ-2	高野 浩司	大阪国際がんセンター脳神経外科	医長	—
		セッション日時		座長1	林 竜平	大阪大学大学院医学系研究科幹細胞応用医学研究室	寄附講座教授	—
		セッション時間	120分	座長2	遠山 周吾	慶應義塾大学医学部循環器内科	専任講師	—
		聴講者		演者1	林 竜平	大阪大学大学院医学系研究科幹細胞応用医学研究室	寄附講座教授	角膜疾患：角膜上皮細胞の作製法
		席数		演者2	土井 大輔	京都大学IPS細胞研究所 臨床応用研究部門	特定拠点講師	パーキンソン病：ドパミン神経前駆細胞の作製法
		単位対象		演者3	杉本 直志	京都大学IPS細胞研究所 臨床応用研究部門	特定拠点講師	HLA欠失血小板の大量作製法
				演者4	神山 淳	慶應義塾大学医学部生理学教室	准教授	脊髄損傷に対する再生医療実現に向けたiPS細胞由来神経前駆細胞の誘導法開発
				演者5	遠山 周吾	慶應義塾大学医学部循環器内科	専任講師	ヒトIPS細胞を用いた心筋再生治療法の現状と展望
U40委員会企画	8	それぞれの最前線でCOVID-19と戦った先生方に聞く、次世代の医学研究に向けて	COVID-19関連の各分野で大きな活躍をされている先生方に、 ①「得体のしれない病気に対してどのように挑んでいくのか、というテーマは未知の将来に立ち向かっていく医学研究を濃厚に凝縮したものであり、ご自身の研究成果やCOVID-19対応を踏まえて その姿勢や心持ちを語っていただく」 ②「明日～数十年先の医学の発展に大きく寄与する先進的な視点を持つ先生方に、若い時どういうことを考えていたか、どこでブレークスルーがあったか、なぜそれを捉えることができたか、若い医師に対して、医学研究の面白さに関してのメッセージをもらう。」	オガナガ-1	廣瀬 佳代	東京都健康長寿医療センター麻酔科	医員	—
		セッション形式	シンポジウム	オガナガ-2	近藤 誠	大阪公立大学大学院医学研究科脳神経機能形態学	教授	—
		セッション日時		座長1	廣瀬 佳代	東京都健康長寿医療センター麻酔科	医員	—
		セッション時間	120分	座長2	近藤 誠	大阪公立大学大学院医学研究科脳神経機能形態学	教授	—
		聴講者	医師	演者1	忽那 賢志	大阪大学大学院医学系研究科感染制御医学講座（感染制御学）	教授	新興感染症の臨床と研究～COVID19に挑んだ臨床経験から～（仮）
		席数		演者2	早川 智	日本産婦人科感染症学会／日本大学医学部病態病理学系微生物学分野	副理事長／教授	COVID-19から妊婦と胎児を守る～産婦人科医のできること～
		単位対象		演者3	西浦 博	京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 環境衛生学分野	教授	感染ダイナミクスの解明：伝播メカニズムはここまで紐解かれた
				演者4	松浦 善治	大阪大学微生物病研究所	特任教授	新型コロナウイルスの性状とその制御法開発
U40委員会企画	9	デジタルヘルスケア（主に治療アプリ）が健康にもたらす役割	昨今、健康関連アプリはヘルスケア、治療行為を行う医療機器まで多様に存在するが2020年に入りclass IV医療機器の様に、治験によりその効果を証明された、使用対象者に確固たる影響をあたえる医療機器かつ保険収載された「治療アプリ」が登場しつつある。このような治療アプリは通常の医療機器開発と同様の開発過程をたどり、対象疾病から治療効果、市場規模まで厳しく評価されながら開発される。アプリで疾病を治療するという概念自体、現段階では非常にチャレンジングな試みであり大きな障壁を乗り越えながら開発される。その体験を共有する事は、今後あらたな医療機器開発のロードマップを確立し、新規開発プレーヤーを持続的に生み出すエコシステムを構築するという意味で重要である。今後様々な治療アプリが出て来ると思われ、こうした薬事承認、保険収載を目指すプレーヤーが領域横断的に一堂に会し、ディスカッションする場を提供する。	オガナガ-1	中島 大輔	慶應義塾大学医学部整形外科教室	特任助教	—
		セッション形式	シンポジウム	オガナガ-2	菅井 桂子	慶應義塾大学医学部整形外科教室	特任助教	—
		セッション日時		座長1	中島 大輔	慶應義塾大学医学部整形外科教室	特任助教	—
		セッション時間	120分	座長2	菅井 桂子	慶應義塾大学医学部整形外科教室	特任助教	—
		聴講者		演者1	廣瀬 大也	経済産業省 商務・サービスグループ 医療・福祉機器産業室	次長（兼）内閣官房 内閣審議官	海外と伍していく国家戦略としての治療アプリの位置づけ
		席数		演者2	佐竹 晃太	株式会社CureApp	代表取締役社長	治療アプリが人類にもたらす未来
		単位対象		演者3	原 聖吾	株式会社MICIN	代表取締役	デジタルセラピューティクスの可能性と課題
				演者4	小林 博幸	塩野義製薬株式会社 DX推進本部 デジタルインテリジェンス部	部長	製薬企業が考える治療アプリの位置づけ
				演者5	飯島 稔	厚生労働省医薬・生活衛生局医療機器審査管理課 プログラム医療機器審査管理室	室長	アカデミアが治療アプリを開発する利点・欠点

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
U40委員会企画	10	技術革新が導く近未来の外科医療	外科学の発展は、外科感染症の制御、全身麻酔技術の確立、腹腔鏡・手術支援ロボットをはじめとした技術革新に後押しされてきた。本セッションでは、2023年現在の革新的技術に基づき、教育・画像・技術支援という観点から20年後の外科手術の未来像を紹介いただく。	オガナイザ-1	中島 大輔	慶應義塾大学医学部整形外科学教室	特任助教	—
				オガナイザ-2	松田 諭	慶應義塾大学医学部外科学（一般・消化器）	助教	—
	セッション形式	シンポジウム		座長1	松田 諭	慶應義塾大学医学部外科学（一般・消化器）	助教	—
	セッション日時			座長2	小松 宏彰	鳥取大学医学部附属病院 女性診療科群	講師	—
	セッション時間	120分		演者1	尾形 哲也	早稲田大学 基幹理工学部 表現工学科	教授	深層予測学習のコンセプトと人間操作に基づくロボットスキル学習
	聴講者	医師		演者2	竹政 伊知朗	札幌医科大学 消化器・総合、乳腺・内分泌外科学講座	教授	遠隔プロクリングシステムを用いた近未来の手術教育
	席数			演者3	徳安 達士	福岡工業大学情報工学部システム工学科	教授	AIによって描かれる近未来の内視鏡外科手術
	単位対象			演者4	中村 雅也	慶應義塾大学医学部 整形外科学教室	教授	私たちが目指す近未来の医療・介護・ヘルスケアとは
U40委員会企画	11	医学生企画～羽ばたく未来へ～		事前学習を経て、総会当日、グループディスカッションを行う（反転学習法）。アイスブレイク、ブレインストーミングを行い、他己との協議によって、問題点の抽出と具体的な解決策を見出す。最後に議論した内容についてグループごとに会場で発表する。地域や所属を越えて議論し、協調性を重視しつつ、将来、多種多様な人材育成に繋がるような議論の場を提供する。グループディスカッションを通して、価値観の共有、リーダーシップ性の発揮、論理的思考力の開発、協調力を養うことを目的とする。また、医学生ならではの柔軟な思考力と発想力をもって我々が思いつかないような視点を見出すことを期待する。参加対象者は医学部6年生とし、COVID-19感染症蔓延によって臨床実習や講義をまともに受けることが出来なかった世代である。	オガナイザ-1	磯部 真倫	新潟大学医歯学総合病院 総合研修部	特任講師、医師研修センター副センター長
			オガナイザ-2		松島 加代子	長崎大学病院医療教育開発センター 医科卒後研修部門 医師育成キャリア支援室	室長 教授	—
	セッション形式	医学生フォーラム	座長1		磯部 真倫	新潟大学医歯学総合病院 総合研修部	特任講師、医師研修センター副センター長	—
	セッション日時		座長2		松島 加代子	長崎大学病院医療教育開発センター 医科卒後研修部門 医師育成キャリア支援室	室長 教授	—
	セッション時間	180分						
	聴講者	医師						
	席数							
	単位対象							
ダイバーシティ推進委員会企画	1	各大学・地域におけるダイバーシティの取り組み			オガナイザ-1	唐澤 久美子	東京女子医科大学 放射線腫瘍学講座	教授・基幹分野長
				オガナイザ-2	相原 道子	横浜市立大学	学長	—
	セッション形式	シンポジウム		座長1	唐澤 久美子	東京女子医科大学 放射線腫瘍学講座	教授・基幹分野長	—
	セッション日時			座長2	相原 道子	横浜市立大学	学長	—
	セッション時間	180分		演者1	唐澤 久美子	東京女子医科大学 放射線腫瘍学講座	教授・基幹分野長	
	聴講者			演者2	相原 道子	横浜市立大学	学長	横浜市立大学と地域におけるダイバーシティのとり組み(仮)
	席数			演者3	林 由起子	東京医科大学	学長	多様性を力に
	単位対象			演者4	佐々木 泰子	お茶の水女子大学	学長	お茶の水女子大学におけるダイバーシティの取り組み（仮）
				演者5	川村 美穂	経済産業省経済産業政策局 経済社会政策室	室長	日本のダイバーシティ経営の現状と課題
			演者6	松尾 清一	東海国立大学機構	機構長	アカデミアにおけるジェンダー平等の取り組みと課題	
			演者7	綾屋 紗月	東京大学 先端科学技術研究センター	特任講師	アカデミアにおける共同創造	

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容		趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
ダイバーシティ推進委員会企画	2	各学会におけるダイバーシティの取り組み			オガナイザ-1	名越 澄子	埼玉医科大学総合医療センター 消化器・肝臓内科	教授	—
					オガナイザ-2	安達 三美	帝京大学医学部 生化学講座	主任教授	—
		セッション形式	シンポジウム		座長1	名越 澄子	埼玉医科大学総合医療センター 消化器・肝臓内科	教授	—
		セッション日時			座長2	安達 三美	帝京大学医学部 生化学講座	主任教授	—
		セッション時間	120分		演者1	名越 澄子	埼玉医科大学総合医療センター 消化器・肝臓内科	教授	日本医学会連合における取組
		聴講者			演者2	南学 正臣	東京大学大学院医学系研究科 腎臓・内分泌内科／一般社団法人 日本内科学会	理事長	今後の日本内科学会の目指すダイバーシティ（仮）
		席数			演者3	平松 昌子	高槻赤十字病院／一般社団法人 日本外科学会	副院長	日本外科学会におけるダイバーシティ推進の取り組み（仮）
		単位対象			演者4	五味 文	兵庫医科大学 眼科／公益財団法人日本眼科学会	教授	
					演者5	小出 寛	順天堂大学大学院医学研究科／公益社団法人 日本生化学会	特任教授／評議員・代議員	小出先生に確認
					演者6	春田 淳志／安井 浩樹	一般社団法人 日本医学教育学会	部会長／副部会長	日本医学教育学会がすすめる多様性の幅と方向性—性別・職種・障害などを踏まえた教育とは—
					演者7	齋藤 典子	公益財団法人がん研究がん研究所 がん生物部／特定非営利活動法人 日本分子生物学会	部長	日本分子生物学会におけるダイバーシティの取り組みと変遷
ダイバーシティ推進委員会企画	3	ダイジェストセッション（仮）			オガナイザ-1	-			—
					オガナイザ-2	-			—
		セッション形式	シンポジウム		座長1	山内 英子	聖路加国際病院 乳腺外科		—
		セッション日時			座長2	大野 京子	東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 医歯学系専攻 認知行動医学講座 眼科学		—
		セッション時間	120分		演者1	名越 澄子	埼玉医科大学総合医療センター 消化器・肝臓内科	教授	各学会におけるダイバーシティの取り組み
		聴講者			演者2	唐澤 久美子	東京女子医科大学 放射線腫瘍学講座	教授・基幹分野長	各大学・地域におけるダイバーシティの取り組み
		席数			演者3	原田 省	鳥取大学医学部附属病院	病院長	男性医師の育児休業の在り方～男性医師は取得すべき？
		単位対象			演者4	楠岡 英雄	国立病院機構	理事長	2024年の医師の働き方改革元年を翌年に控えて —課題と展望
					演者5	小松 宏彰	鳥取大学医学部附属病院 女性診療科群	講師	U40が考える働き方改革の未来～組織運営と現場の声は合致するのか？建前と本音を議論する
ダイバーシティ推進委員会・U40委員会企画		男性医師の育児休業の在り方～男性医師は取得すべき？		男性の育児休業取得率は微小ながらも上昇し、企業によっては必須としているところも増えてきている一方で男性医師にとって育休の取得はキャリアのみならず、日常業務の他者への負担増も危惧されてなかなか取得出来ないのが現状である。政府は2019年度の7.48%の男性育休取得率を2025年に30%まで引き上げることを目標としている。そこで、男性医師目線で、今後の育休をどう考えるかについて議論する。	オガナイザ-1	原田 省	鳥取大学医学部附属病院	病院長	—
				大学病院勤務医は学外アルバイトによって生計を立てていることが多く、育休中は法律上アルバイトも禁止され、給料面から取得は困難となっていた。しかし、2021年6月3日、改正育児・介護休業法が成立したことでアルバイトが可能となることに加え、「出生時育児休業（男性版産休）」が新設され、男性育休の取得率上昇が期待される。今後、この法律が社会にどう影響を与えるのか（与えたのか）、そして、男性医師は育休を取得することが出来るのか議論する。さらに、育休が普及した場合の抜け穴をどう埋めるのかについても併せて議論したい。（女性医師増加がもたらす医師の在り方、働き方改革を目前に控えたタイミングであり、本テーマは非常に興味深いと考える）	オガナイザ-2	小松 宏彰	鳥取大学医学部附属病院 女性診療科群	講師	—
		セッション形式	シンポジウム		座長1	原田 省	鳥取大学医学部附属病院	病院長	—
		セッション日時			座長2	小松 宏彰	鳥取大学医学部附属病院 女性診療科群	講師	—
		セッション時間	120分		演者1	森本 泰弘	積水ハウス株式会社 ESG経営推進本部 ダイバーシティ推進部		
		聴講者			演者2	平岡 宏一	厚生労働省 雇用環境・均等局 職業生活両立課	課長	
		席数		主な対象者：医師および男性医師を夫にもつ女性 目標人数：100名	演者3	小室 淑恵	株式会社ワーク・ライフバランス	代表取締役社長	男性育休取得できる職場を作るには～業績・エンゲージメント向上の好事例を紹介～
		単位対象			演者4	藤巻 高光	埼玉医科大学脳神経外科		女性医師のダメ夫の反省と未来への提言

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容		趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
日本歯科医師会企画	1	周術期対応における医科・歯科連携にどう取り組むべきなのか			オガナイザ-1	-			-
		セッション形式	シンポジウム		オガナイザ-2	-			-
		セッション日時			オガナイザ-3	-			-
		セッション時間	90分		座長1	大泉 誠	東京都歯科医師会	理事	-
		聴講者	歯科医師・医師		演者1	片倉 朗	東京歯科大学 水道橋病院 東京歯科大学 口腔病態外科学講座	病院長 教授	口腔科学が健康長寿を支援する医療を目指して
					演者2	小松本 悟	足利赤十字病院 藤田医科大学	名誉院長 特命教授	なぜ医科歯科連携は進まないのか-足利赤十字病院における医科歯科連携の紹介を兼ねて-
日本歯科医師会企画	2	医科と歯科が連携したこれからの摂食嚥下障害対応			オガナイザ-1	-			-
		セッション形式	シンポジウム		オガナイザ-2	-			-
		セッション日時			オガナイザ-3	-			-
		セッション時間	90分		座長	戸原 玄	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 医歯学系専攻 老化制御学講座 摂食嚥下リハビリテーション学分野	教授	-
		聴講者	歯科医師・医師		演者1	植田 耕一郎	日本大学歯学部 摂食機能療法学講座	教授	おいしく、楽しく、美しく、摂食機能の実力
					演者2	二藤 隆春	埼玉医科大学 医学部 総合医療センター 耳鼻咽喉科	准教授	食べることができた！ 嚥下障害を外科的に治す
日本看護協会企画	1	Society 5.0における看護 – データやテクノロジーが拓く看護の未来 –		現在国では、Society 4.0の情報社会からSociety 5.0 社会の実現に向けた取り組みが進められている。Society 5.0 は、医療の世界ではAIによるビッグデータの解析で、健康促進、病気の早期発見、最適な治療法選択・対処に係るシステムの実現や、医療・介護ロボットの実装による業務負担の軽減等、様々な課題解決が期待されている。看護においても、少子高齢化に伴い医療の担い手の減少が進む中、様々なビッグデータやテクノロジーの積極的な活用は、看護の可視化や業務の効率化や生産性の向上につながる事が期待される。 本シンポジウムでは、Society 5.0とはどのような社会か、社会の変革に看護職はどのように対応していく必要があるか、課題も含めて分かりやすく講演する。その後、臨床現場での音声入力、発話情報の分類技術による看護記録の質向上と効率化やAIを活用したハイリスク患者の早期抽出、テクノロジーを活用した業務改善の実際とその効果について紹介する。そして最後に、ビッグデータを活用した看護の可視化・質向上に向けた日本看護協会の取り組みを紹介し、Society 5.0 社会の実現に向けた看護の将来展望について、臨床・看護職能団体の視点から幅広く議論を行う。	オガナイザ-1	林田 賢史	産業医科大学 医療情報部	部長	-
		セッション形式	シンポジウム		オガナイザ-2	吉川 久美子	公益社団法人日本看護協会	常任理事	-
		セッション日時			座長1	林田 賢史	産業医科大学 医療情報部	部長	-
		セッション時間	90分		座長2	吉川 久美子	公益社団法人日本看護協会	常任理事	-
		聴講者	医師・看護師		演者1	北岡 有喜	社会医療法人岡本病院（財団） 京都岡本記念病院 国立病院機構京都医療センター 医療情報部	副院長 顧問	Society5.0時代の医学・医療と看護 ～効果的・効率的な医療・看護サービスを目指して～
		席数			演者2	森口 真由美	医療法人社団KNI 北原国際病院	看護科統括	AIを活用したデジタルホスピタルの実現に向けた共同研究の実際
		単位対象			演者3	榊原 隆志	刈谷豊田総合病院化学療法センター	リーダー	抗がん薬調製ロボットの導入による薬剤師業務の効率化とチーム医療への貢献
					演者4	秋山 智弥	公益社団法人日本看護協会	副会長	未定
日本看護協会企画	2	特定行為研修を組み込んだ認定看護師の実践成果から見る未来の展望		国は2015年に「2025年に向け、さらなる在宅医療等の推進を図るために医師の判断を待たずに、手順書(=指示)により研修修了看護師が一定の診療の補助を行う」特定行為研修制度を創設した。日本看護協会ではこれからの医療ニーズに応えられる認定看護師の教育にもこうした病態判断力と臨床推論力は強化すべきと認定看護師制度の再構築を決定した。特定行為研修を組み込んだ新たな教育はB課程として2020年にその教育が開始され、2021年3月、約200名の修了生を輩出したところである。また、既存の認定看護師には特定行為研修を受講することを支援し、修了した者はB課程修了者すなわち「特定認定看護師」として移行手続きすることを推進している。日本看護協会認定部によると2021年5月B課程登録者は約900名であるが全国特定行為研修修了者3300名のうち、1300名ほどは認定看護師が占めている。特定行為研修を活用した特定認定看護師の育成は今後も増加の一途をたどると推定される。特定行為研修が開始されてから7年を経過する2022年、それまでの特定認定看護師による実践から、2040年に向けた医療や福祉の現場でどのような活躍が期待できるか、未来に向けての医療の在り方について考える機会としたい。	オガナイザ-1	市岡 滋	埼玉医科大学病院形成外科	教授	-
		セッション形式	シンポジウム		オガナイザ-2	溝上 祐子	前 公益社団法人日本看護協会	認定看護師教育課程長	-
		セッション日時			座長1	市岡 滋	埼玉医科大学病院形成外科	教授	-
		セッション時間	100分		座長2	渋谷 智恵	公益社団法人 日本看護協会 看護研修学校	認定看護師教育課程長	-
		聴講者	医師・看護師		演者1	木澤 晃代	公益社団法人日本看護協会	常任理事	特定行為研修を組み込んだ認定看護師への期待
		席数			演者2	杉田 学	順天堂大学医学部附属練馬病院救急・集中治療科	科長・教授	医師の立場から見た特定認定看護師の育成と普及について
		単位対象			演者3	山崎 優介	広島市立安佐市民病院 糖尿病看護認定看護師・特定看護師		医療の未来を描く 糖尿病看護認定看護師としての実践
					演者4	間宮 直子	大阪府済生会吹田病院 皮膚・排泄ケア認定看護師・特定看護師	専門副看護部長	在宅・施設訪問で行う創傷における特定行為の実践と成果 (仮)

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 番号	セッション内容	趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
日本薬剤師会・日本病院薬剤師会合同企画		薬剤師の連携による地域医療への貢献と医療DXへの対応	政府は今年6月に閣議決定した「骨太方針2022」の中で、医療DX分野について推進する方針を示しています。オンライン資格確認システムのネットワークを活用して多様な医療情報を共有・交換できる「全国医療情報プラットフォームの創設」、標準型電子カルテの検討や、電子カルテデータを新しい医療技術の開発などに有効活用することを含む「電子カルテ情報の標準化等」、デジタル化時代に対応した診療報酬を目指す「診療報酬改定DX」が将来を見据えた形で推進されていく構想となっています。特に医療・介護分野のDXでは、データヘルス、オンライン診療、AI・ロボット・ICTの活用によって、様々な患者情報の共有・交換や効率性の向上、さらに適正な医療・薬物療法の提供が可能となります。地域医療においては患者情報を共有・交換することで医療機関と薬局が連携してより質の高い医療が提供可能となり、特に薬物療法の分野では、医療機関・薬局の薬剤師が連携して情報共有・交換することにより、入退院時や外来における円滑で適正な薬物療法の提供に繋げることが期待できます。将来の医療の発展に向けて、薬剤師が連携して医療DXにどのように対応し、地域医療の質の向上と効率化にいかに関与していくべきかを考えていきます。	オガナガ-1	-			
		セッション形式	シンポジウム	座長1	山本 信夫	日本薬剤師会	会長	
		セッション日時		座長2	武田 泰生	日本病院薬剤師会	会長	
		セッション時間	120分	演者1	未定	厚生労働省より		(仮) 医療DXに対応する薬剤師業務の変革
		聴講者	薬剤師	演者2	渡邊 大記	日本薬剤師会	副会長	(仮) 地域医療における薬業連携と医療DX
		席数		演者3	座間味 義人	岡山大学病院薬剤部	教授／薬剤部長	(仮) ビッグデータを基にした地域医療への貢献
		単位対象		演者4	村杉 紀明	日本薬剤師会	理事	(仮) 薬局薬剤師による地域連携と医療DXへの対応
				演者5	関 利一	株式会社日立製作所 ひたちなか総合病院 TQM統括室経営支援センター	センター長	(仮) ICT導入に伴う地域連携の事例
日本病院薬剤師会企画		地域に寄り添う病院薬剤師の役割～きめ細かな薬物療法支援のために～		オガナガ-1	筒井 由佳	社会医療法人近森会 近森病院 薬剤部	薬剤部長	-
		セッション形式	シンポジウム	オガナガ-2	荒木 隆一	市立敦賀病院 医療支援部	部長／理事	-
		セッション日時		オガナガ-3	濱浦 睦雄	茨市立病院 医務局薬剤科	薬剤部長	-
		セッション時間	120分	座長1	荒木 隆一	市立敦賀病院 医療支援部	部長／理事	-
		聴講者		座長2	濱浦 睦雄	茨市立病院 医務局薬剤科	薬剤部長	-
		席数		演者1	定岡 邦夫	特定医療法人人生仁会 須田病院 薬剤部	部長	地方都市における地域医療連携の取り組み～地域を守る！故郷を守る！～
		単位対象		演者2	宮川 哲也	上越地域医療センター病院 薬剤科	薬局長	多職種と築き上げる薬物治療～中小病院ならではの協働・連携
				演者3	湍田 憲一	医療法人良秀会 部門エリア支援本部 薬剤部門エリア統括 岸和田藤井病院 薬剤科	薬剤科長	検討中
				演者4	谷藤 弘淳	医療法人有恒会 こたまホスピタル 薬剤部	薬剤副部長	薬剤師が行う精神科薬物療法支援～統合失語症入院患者の抗精神病薬の減量・薬剤師外来面談より～
				演者5	清水 孝子	東京証券健康保険組合診療所 薬剤部	薬剤部長	入院外医療における薬剤師の役割について～診療所での薬剤師外来、在宅医療を中心に～
学生企画	1	医学部卒業後の多様なキャリアパスの在り方	2004年度から始まった初期臨床研修必修化は医局入局者の減少を引き起こし、臨床医のキャリアパスに多様性をもたらした。医学部卒業後もしくは臨床研修修了後に臨床医以外の進路を選択する医師も増えている。さらにAIやビッグデータを活用した新しい医学・医療の隆盛が目覚しく、デジタル革命を中心に我々の生活は大きく変化している。このような激動の世の中で、医師ならではの経験や視点をもとに独自の切り口で社会課題の解決に取り組む医師も少なくない。本セッションでは多種多様なキャリアを歩む医師・研究者を招き、これからの医療者の可能性やキャリアパスについて医学部学生と議論する。	座長1	中桐 悠一郎	東京大学 医学部・大学院医学系研究科5年生		-
		セッション形式	シンポジウム	座長2	廣瀬 謙造	東京大学 医学部・大学院医学系研究科MD研究者育成プログラム室	室長	-
		セッション日時		演者1	村上 尚加	Brigham and Women's Hospital, Harvard Medical School, USA	Assistant Professor	挑戦を続けるということ- career path as a physician scientist-
		セッション時間	120分	演者2	岩本 桃子	元国境なき医師団、現洛和会丸太町病院		未定
		聴講者		演者3	黒田 真也	東京大学理学系研究科		基礎医学から理学へ 異分野融合への旅～始まりは解剖実習を終えたある夏の夜～
				演者4	三谷 明範	Artera		医療AIのエンジニアというキャリア
学生企画	2	ポストコロナパンデミックの医学部教育の可能性	新型コロナウイルスパンデミックの影響で多くの医学部学生はオンラインでの授業や実習内容の大幅な変更を経験した。また、これから医学部に入学する学生の多くはZ世代以降の世代であり、オンライン教育に十分に適応していると考えられる。これまでとは異なるオンライン世代の医学部教育を受けた医師のアドバンテージや可能性、注意すべき点などを議論する。また、オンライン授業を柔軟に取り入れた医学部教育の在り方について議論する。	座長1	太田 礼美	東京大学 医学部・大学院医学系研究科5年生		
		セッション形式	シンポジウム	座長2	堀田 晶子	東京大学医学部臨床実習・教育支援室		
		セッション日時		演者2	武田 裕子	順天堂大学医学研究科医学教育学	教授	健康格差の社会的要因に目を向けられる医師の育成
		セッション時間	120分	演者3	森 保道	虎の門病院 内分泌代謝科		卒後臨床研修における屋根瓦式研修制度のアドバンテージ
		聴講者		演者1	清水 秀幸	東京医科歯科大学 M&Dデータ科学センター ヘルスインテリジェンス部門 AI システム医科学分野	教授	オンラインによる学生医学研究・交流のすゝめ
				演者4	齋藤 朱花	佐久総合病院 佐久医療センター	初期研修医	オンライン実習を経た研修医からみる医学部教育

第31回日本医学会総会
学術プログラム一覧

セッション種別	セッション 枝番	セッション内容		趣旨	担当	氏名	所属	役職	演題名（仮）
Late Breaking Session		幹細胞研究とその臨床応用		組織幹細胞、iPS細胞、ES細胞など、多彩な幹細胞の応用が現実となりつつあり、再生医療の視点から注目を集めている。さまざまな組織幹細胞の発生や動態は、わが国が世界の最先端を担っている領域である。またがん幹細胞の実体や意義についても知見が蓄積し、その制御法も開発されつつある。近年、正常ならびに疾患の幹細胞にかんして画期的な成果を発表している研究者に、その最新の研究内容を語っていただく。	オガナイザ-1	北川 昌伸	東京医科歯科大学・新渡戸記念中野総合病院		
		セッション形式	シンポジウム		オガナイザ-2	黒川 峰夫	東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻生体防御腫瘍内科学講座 血液・腫瘍病態学	教授	
		セッション日時			座長1	北川 昌伸	東京医科歯科大学・新渡戸記念中野総合病院		
		セッション時間	120分		座長2	黒川 峰夫	東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻生体防御腫瘍内科学講座 血液・腫瘍病態学	教授	
		聴講者			演者1	西田 幸二	大阪大学 脳神経感覚器外科学 眼科学		幹細胞による角膜の再生医療
		席数			演者2	斎藤 通紀	京都大学 高等研究院	教授	生殖細胞の発生機構の解明とその試験管内再構成
		単位対象			演者3	山崎 聡	筑波大学医学医療系幹細胞治療研究室	教授	造血幹細胞の増幅と臨床応用
					演者4	後藤 由季子	東京大学薬学部 分子生物学	教授	神経幹細胞の発生と制御
					演者5	後藤 典子	金沢大学がん進展制御研究所 分子病態研究分野		乳がん幹細胞とその治療戦略